

先生方とともに  
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉

高校版

2018  
Volume 6

2月

# VIEW21

## 生徒とともに気づく

特集

### 多面的評価

——そのあり方と実践を考える

主体的・対話的で深い学びへ  
実践 アクティブ・ラーニング

物理

ちりゅうがし  
愛知県立知立東高校 都築慶和

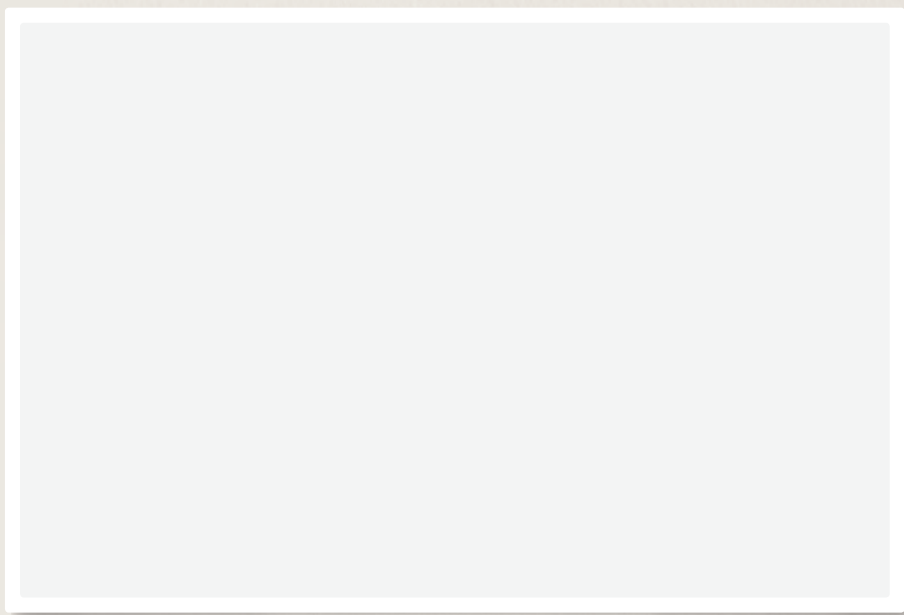
英語

大阪府立和泉高校 森 一真

指導変革の軌跡

宮城県・私立東北学院中学校・高校

三重県立桑名北高校



## 授業に夢中！

**生徒** 小関先生の英語の授業では、ペアで話したり、エッセーを書いたり、絶えず英語を使っているし、しかも自分の考えを伝える課題が多くて、頭が常にフル回転しています。いつも50分間があつという間です！

**生徒** 1年生の最初の頃は3~4つの単語をつなげて話すだけで精いっぱいだったけれど、2年生になった今では、2文くらいならすらつと話せるようになりました。エッセーもだいたい書けるようになり、自分でも驚くほど英語力が上がっていると手応えを感じています。

**先生** エッセーは、5分間で平均50単語以上は書けるようになったよね。誰もが話したい、書きたいと思うようなトピックを選び、活動を工夫してきたかいがあったよ。

**生徒** 印象に残っているのは、最初と最後だけ英文が決まっていて、その間を1人1文ずつ書いて、クラス全員で物語を完成させた活動です。話をスムーズにつなげるために前の人までが書いた英文を真剣に読んだし、どう展開させようかと想像して書くのは楽しかった！

**先生** 事実や意見だけでなく、ユーモアのあることも英語で表現できるようになってほしいと思って、この活動を取り入れたんだ。みんな、想像力を発揮して、

かなり盛り上がったね。

**生徒** 正直、授業以外で英語を使う機会はそんなにないと思っていましたが、修学旅行先で外国人に場所を尋ねられたことがありました。思いの外聞き取れて、英語で答えることができ、授業で学んだことは役に立つんだと思いました。それと、相手の話す英語が先生の発音と同じで、「先生、すごい！」と感動しました。

**先生** それはうれしいな。先生が本格的に発音を学び始めたのは大学時代で、1年間の留学もしたけれど、今もCDを聞きながらの発音練習は欠かせないよ。

**生徒** 修学旅行から帰ってきた後、授業でとっさに単語が出てこないことがありました。ずっと授業がなかったからだと思うと、毎日続けることが大切なのだと実感しています。もう少し上手に英語を話せるようになりたいので、長く話す機会が授業にあるとうれしいです。

**先生** みんな、かなり力がついてきたし、今度取り入れよう！ 将来、仕事で英語を使ったり、外国人と友人になったりと、英語が必要な時に英語力がないからと諦めてほしくないのよ。今後も、楽しみながら学べる授業にしていくために工夫していくよ。

**小関 隼先生** 教職歴7年。同校に赴任して3年目。進路指導部。2学年担任。英語科。

**北海道伊達緑丘高校** 全日制／普通科／共学／1学年約140人／2017年度入試合格実績(現役のみ)国公立大は、小樽商科大、室蘭工業大などに5人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、文教大などに延べ50人が合格。

2 特集

# 多面的評価

## —そのあり方と実践を考える

4 課題整理

資質・能力の育成、学びの質の向上に向け、  
 多面的評価の推進を

8 座談会

生徒の資質・能力を引き出し、  
 可能性を広げる多面的評価とは

神戸大学 アドミッションセンター 特命准教授 進藤明彦  
 東京都立町田高校 統括校長 牛来峯聡  
 福岡県立折尾高校 進路指導部 進学指導課長 中野孝太

12 実践事例1 石川県立工業高校

ルーブリックによる自己評価と教師の評価が  
 自己を客観視させ、主体的な姿勢を育む

17 実践事例2 静岡県立御殿場南高校

複数の教師による評価や生徒同士の相互評価で、  
 自己理解を促し、多様な資質・能力を育む

22 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

22 物理

愛知県立知立東高校 都築慶和  
 実験の失敗を成功に導く経験から、  
 研究の醍醐味を実感し、協働の大切さも学ぶ

26 英語

大阪府立和泉高校 森 一真  
 英語を使う必要感・有用感を重視した課題設定で  
 生徒の主体性を引き出す

30 指導変革の軌跡

30 宮城県・私立東北学院中学校・高校

魅力的な学校づくり  
 特色あるコース制の導入とPDCAサイクルの確立で、  
 生徒の希望進路を実現

34 三重県立桑名北高校

学力向上とキャリア教育  
 「オール桑北」で学力向上とキャリア教育改革を進め、  
 地域に信頼される学校へ

38 改良! 指導ツール ビフォーアフター

2年生 3学期  
 志望理由シート

42 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

42 法政大学 キャリアデザイン学部

体験的な学びを通して自分に向き合い  
 キャリアを創る視点を磨く

44 大同大学 情報学部 総合情報学科

かおりデザイン専攻  
 1年次から社会とかかわり、  
 多分野で活躍するかおりの専門家を目指す

46 これからの会議・研修のあり方、つくり方

授業デザインを考える研修会  
 —長崎県の若手・中堅教師による自主研修会レポート—

52 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「これが僕です」  
 京都府・京都市立銅駝美術工芸高校 渡邊野子

今月の表紙メッセージ

生徒とともに  
 気づく

◎今号の特集テーマの「多面的評価」は、2016年12月公表の中央教育審議会の答申に「大学入学者選抜改革の観点からも、こうした多面的評価の充実が求められる」とあるように、高校教育と大学教育をつなぐ重要な要素の1つとされています。そのため、大学入試改革の文脈において注目されがちですが、大学入試における多面的評価はあくまで充実すべき点の一部です。まず考えるべきは、高校教育における多面的評価のあり方であり、それを見いだして初めて、大学入試にどのように向き合えばよいのかが見えるのではないのでしょうか。そして、多面的評価の充実の先には、教師だけでなく、生徒とともに得る気づきがあると、今号の特集を通じて感じていただけたと思います。

『VIEW21』高校版  
 編集長 柏木 崇

<http://berd.benesse.jp>

本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

印刷製本/ (株)協同プレス 編集協力/ (有) ベンダコ 執筆協力/ 中丸 満、二宮良太 撮影協力/ 加納将人、川上一生、岸 隆子、谷口 哲、ヤマグチイッキ

\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます

\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

©Benesse Corporation 2018

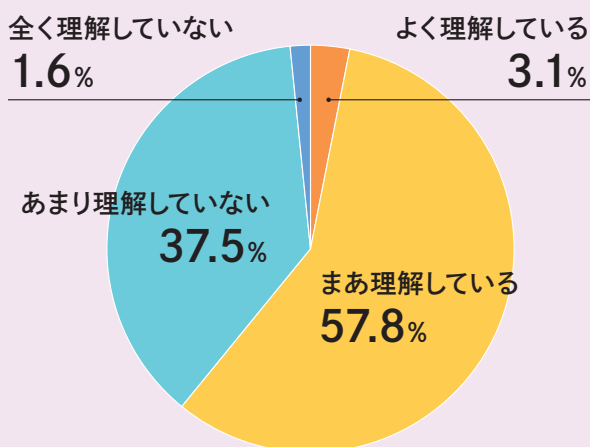
# 多面的評価

## —— そのあり方と実践を考える

次期学習指導要領に関する中央教育審議会の答申や、2017年7月に文部科学省から公表された「高大接続改革の実施方針等の策定について」でも述べられているように、「多面的評価」は、高校教育においても今後一層求められていくと考えられる。しかしながら、学校現場における多面的評価の理解は必ずしも進んでいるとは言えず、それに取り組んでいる学校もまだまだ少ないというのが現状だ。そこで今号では、多面的評価の現状と課題を整理し、多面的評価の意義やそれを実践する上で留意すべき点について考えていく。

### 多面的評価に関する高校教師の状況

Q 「多面的評価」の理解度を教えてください。



出典／『VIEW21』高校版読者モニターへのアンケート結果  
(アンケートは2017年12月にウェブとファクスで実施。回答数は64)

#### 「よく・まあ理解している」と回答した教師の声

- ◎高校は大学に橋渡しして終わりではなく、3年間の生徒の成長の様子を基に自校の指導を振り返ることができるようにしたい。そのために、高校は多面的に生徒の様子を見つめ、具体的な記述をもって大学での初年次指導につなげたい。
- ◎様々な活動あるいは様々な面から評価されることで、子どもは積極的に学びに向かうものではないでしょうか。少しでも「これでいいんだ」と思わせることで、自ら学ぼうとする姿勢を創り上げていくものだと思います。
- ◎学力だけでは測れない生徒の様々な能力や長所を評価対象とすることで、様々な資質・能力を持った生徒の進路の可能性が広がる。

#### 「あまり・全く理解していない」と回答した教師の声

- ◎必要性をまだ実感していない。
- ◎どのような資質・能力をどういった方法で評価しようとしているのかが、あまり分からない。
- ◎日々の業務に追われすぎて、しっかり勉強する余裕があまりない。

## 本号のテーマ

高校教育において求められる**多面的評価**とはどのようなものか。  
その実践のために教師に求められること、実践上の留意点は何か。

### 1

## 多面的評価の目的と課題

課題整理【P.4～7】

- ◎資質・能力を育成するためには、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかなどを捉えることが求められる。
  - ◎各教科等の学習評価は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で行う。それらの観点は、毎回の授業ですべてを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で行うことが重要である。
  - ◎資質・能力のバランスの取れた評価を行うために、
- レポート作成、発表、グループワークといった多様な活動によるパフォーマンス評価などを取り入れるとともに、総括的評価のみならず、一人ひとりの多様性に応じて、形成的評価を行い、資質・能力がどのように伸びているか、日々の記録やポートフォリオを通じて把握することが必要である。
- ◎生徒一人ひとりが自らの学習状況やキャリアを見通したり、振り返ったりすることができるよう、教師からの評価だけでなく自己評価を行うことも求められる。

### 2

## 多面的評価の意義と実践上の留意点

座談会【P.8～11】

#### 多面的評価の意義

- ◎ペーパーテストだけでは測れない生徒の隠れた力や可能性が見えることで、教師の生徒理解が深まり、指導の質や意欲が向上する。
- ◎これからの時代に求められる力や授業で育みたい力を伝えることで、生徒は、授業が自身の資質・能力を高める場になると理解し、前向きに取り組むようになる。
- ◎これまでは気づかれなかった資質・能力が評価され、認めてもらえることで、生徒の自己肯定感の向上につながり、日常生活や学び、将来への意欲が高まる。
- ◎生徒も教師も生き生きとし、学校全体が活性化する。

#### 実践上の留意点

- ◎自校が育成を目指す資質・能力を全校で共有し、教師間でベクトルを合わせる。
- ◎主体性等を測る際、発言回数などだけの表層的な評価にならないよう、評価基準等を定める。
- ◎教師からの評価だけでなく、自己評価・相互評価も取り入れ、多面的に評価する。
- ◎総括的な評価だけでなく、eポートフォリオ等を通じて形成的な評価も行う。
- ◎生徒が自己の成長や変容を認識できる、振り返りの場面や仕掛けを設定する。
- ◎社会で必要とされる人材の育成の結果、多様な資質・能力を身につけた生徒が大学の多様な入試に対応できるという意識を持つ。



神戸大学  
アドミッション  
センター  
特命准教授  
**進藤明彦**



東京都立  
町田高校  
統括校長  
**牛来峯聡**



福岡県立  
折尾高校  
進路指導部  
進学指導課長  
**中野孝太**

#### 実践事例1 【P.12～16】

ループリックによる自己評価と教師の評価が  
自己を客観視させ、主体的な姿勢を育む  
**石川県立工業高校**

#### 実践事例2 【P.17～21】

複数の教師による評価や生徒同士の相互評価で、  
自己理解を促し、多様な資質・能力を育む  
**静岡県立御殿場南高校**

# 資質・能力の育成、学びの質の向上に向け、 多面的評価の推進を

多面的評価とは、どのように生徒を評価することなのか、従来の評価とは何が異なるのか。

次期学習指導要領に関する中央教育審議会の答申や、文部科学省から公表された「高大接続改革の実施方針等の策定について」などを基に、多面的評価の推進が求められることになった背景や、大学入試改革との関係などと合わせて、解説する。

## 多面的評価が求められる背景

### 資質・能力の育成を目的に 評価の観点を3つに整理

AI（人工知能）の発達やIoT（\*1）の実現といった技術革新などの影響により、以前は想像もしなかった姿に社会は変わろうとしている。そのような予測困難な社会を生きる生徒が未来を切り拓いていけるよう、次期学習指導要領においては、「何を学ぶか」という、学習内容（コンテンツ）にとどまらず、それを学ぶことよって「何ができるようになるか」、すなわち「資質・能力（コンピテンシー）の育成」という視点

が明確に示されることになった。具体的には、「生きて働く知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の3つの柱である。

そういった資質・能力の育成を図るためには、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかなどを捉えていくことが不可欠である。つまり、学習評価において、生徒にどういった資質・能力が身についたか、実際の指導によって表出した生徒の変化や成長を見取り、生徒が次の学びに

向かえるようにする必要があるということだ。今後、各校には、資質・能力の3つの柱に基づいた指導と評価の改善を一体的に進めていくことが、ますます求められるようになる。

## 高校教育における多面的評価

### 多様な活動を通して 成長・変容を客観的に捉える

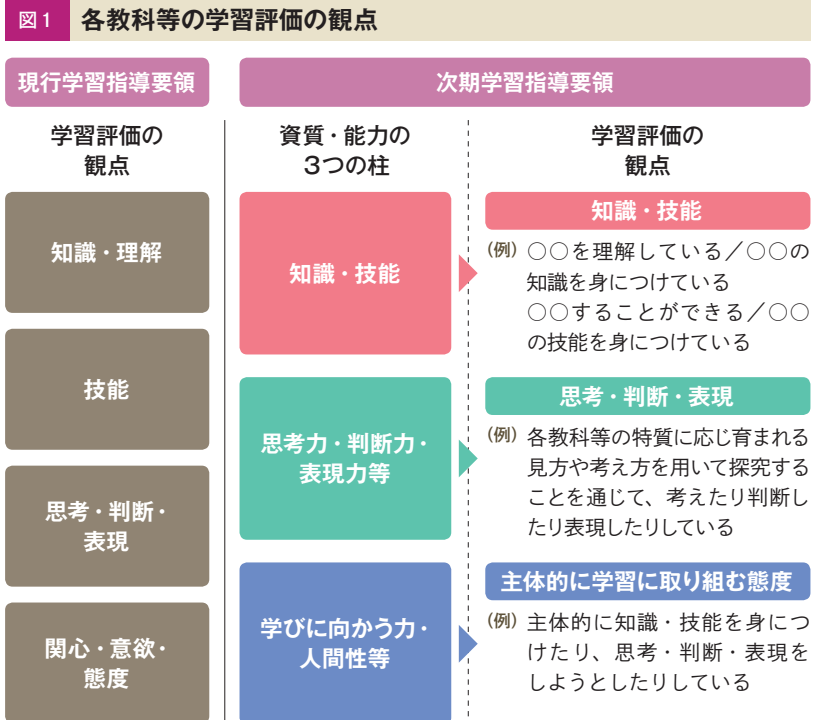
次期学習指導要領では、すべての教科等において、教育目標や内容を、資質・能力の3つの柱に基づき再整理することとしている。学習評価の観点もそれに応じて、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習

に取り組む態度」の3つに整理されることになる（図1）。

それら3つの観点については、毎回の授業ですべてを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てて行うことが重要である。特に、「思考力」や「主体的に学習に取り組む態度」などは内面的なものであり、可視化しづらいため、挙手の回数やノートの取り方といった形式的な活動の結果や単一の評価方法のみで評価が完結することがないよう、留意することが必要である。

また、教師からの評価だけでなく、

\*1 Internet of Things の略。スマートフォンやパソコンだけでなく、様々な物に通信機能を持たせ、インターネットに接続したり、相互に通信したりして、自動制御や情報収集などを行うこと。



\* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成

生徒の自己評価や生徒同士による相互評価をすることも求められる。そうすることで、より客観的に生徒一人ひとりが自らの学習状況やキャリアを振り返り、自分の内にある可能性や資質・能力を認識することができる。それにより、生徒自身が学習の目標を持ち、方略を見直しながら学習を進められるようになるだろう。

変化を見通すことが難しい現代社会において、生徒一人ひとりに応じた資質・能力を伸ばしていくためには、校内の多様な活動を通して個々の生徒に成長のきっかけを与えながら、それぞれの学習の過程と成果を踏まえた指導が重要となる。その意味でも、中・長期的な視野を持ち、プロセスを含めた生徒個々の学びを把握する評価の開発と、それを校内

**図2 多様な評価方法の例**

**パフォーマンス評価**

知識やスキルを使いこなす（活用・応用・統合する）ことを求めるような評価方法。論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する。

**ルーブリック**

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表（下記はイメージ例）。

項目 \ 尺度	Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ
項目	……できる ……している	……できる ……している	……できる ……している	……できない ……していない

記述語

**ポートフォリオ評価**

児童・生徒の学習の過程、成果などの記録や作品を計画的にファイル等に集積。そのファイル等を活用して児童・生徒の学習状況を把握するとともに、児童・生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。

\* 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の補足資料を基に編集部で作成

で共有する体制をつくること、すべての学校に求められていると言える。

**多面的評価の方法**

**ペーパーテストに偏らない学習過程を含めた評価が求められる**

生徒の学びを、そのプロセスを含めて評価するには、具体的にどのような方法があるのだろうか。例えば、

ルーブリックといった多様な活動に取り組みせ、その成果を評価する「パフォーマンス評価」はその一つである（図2）。従来のペーパーテストに加えて、そういった評価方法を併用するとともに、学期や年度といったまとまった単位で「全体を通してよかったこと（悪かったこと）」を見る総合的な評価のみならず、生徒一人ひとりが多様に学びをつくり上げていく過程を見る形成的な評価を行い、どのような資質・能力がどの

ように、どの程度伸びているのかを把握していくことも重要だ。そのためには、日々の学びや活動を個人で記録する、「ポートフォリオ」を充実させる必要があるだろう（P.5 図2）。

**大学入試改革における多面的評価**

**多様な資質・能力を多面的に測る大学入試へ**

高等教育、大学教育、大学入学者選抜を三位一体で改革する高大接続改革が進められている。2017年7月に公表された「高大接続改革の実施方針等の策定について」では、21年度大学入学者選抜から、「一般入試」「AO入試」「推薦入試」という従来の入試区分を、「一般選抜」「総合型選抜」「学校推薦型選抜」に改めるとされた。

一般選抜では、筆記試験に加え、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより積極的に評価するため、調査書や志願者本人が記載する資料等の積極的な活用を促すとしている。総合型選抜、学校推薦型選抜においては、調査書・推薦書等の提出書類だけでなく、小論文、

プレゼンテーション、口頭試問、各教科・科目に係るテスト、「大学入学共通テスト」等のうち、少なくともいずれか1つの活用が必須化されることとなった。以上のように、これからの大学入学者選抜においては、どのような入試形態であっても多面的評価が推進される見通しだ。

さらに、資質・能力を適切に評価するため、18年度高校入学生から、調査書の様式が見直されることも明記された（図3）。具体的には、現行の様式から、「指導上参考となる諸事項」の欄が拡充され、時系列で6つの項目（①各教科・科目及び総合的な学習の時間の学習における特徴等、②行動の特徴、特技等、③部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等、④取得資格・検定等、⑤表彰・顕彰等の記録、⑥その他）ごとに記載できるように分割される。また、裏表の両面1枚の制限を撤廃。

これまで調査書は3年生の学級担任が作成するケースが多かったと思われるが、今後は、3年間を通じた計画的な対応が求められる。

このように、生徒の希望進路の実現という面からも、多面的評価の推進は、現場にとって喫緊の課題と言

図3 新たな調査書のイメージ（案）

表面

裏面

指導要録に合わせて、現行の調査書の5、8、9の項目の順番を入れ替え。

調査書の様式について、裏表の両面1枚となっているが、この制限を撤廃し、弾力的に記載できるようにする。

大学が指定する特定の分野（例：保健体育、芸術、家庭、情報等）において、特に優れた学習成果を上げたことを記載することができる。

（注）「調査書記入上の注意事項等について」において、共通の留意事項として記載。

\* 文部科学省「大学入学者選抜改革について」（2017年7月）の記載資料を基に編集部が作成

えるのではないだろうか。

### eポートフォリオの活用で 高校・入試・大学をつなぐ

国公立・私立を問わず、各大学の入学者受入れの方針に基づき、受験者を多面的に評価するための入学者選抜改革の取り組みも進展している。「思考力・判断力・表現力」や「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」に関する評価がより重視されるよう、ICTを活用した「主体性等」を評価する一般選抜のモデルの開発がその1つだ(図4)。

例えば、文部科学省「大学入学者選抜改革推進委託事業(主体性等分野)」で構築・運営する、高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」は、高校生が学校の授業や行事、部活動などでの学びや、自身が取得した資格・検定、学校以外の活動成果を記録し、それを積み上げていくことでeポートフォリオとして情報を蓄積するとともに、将来的にはそのデータを大学入試時に利用できるようにするとしている。

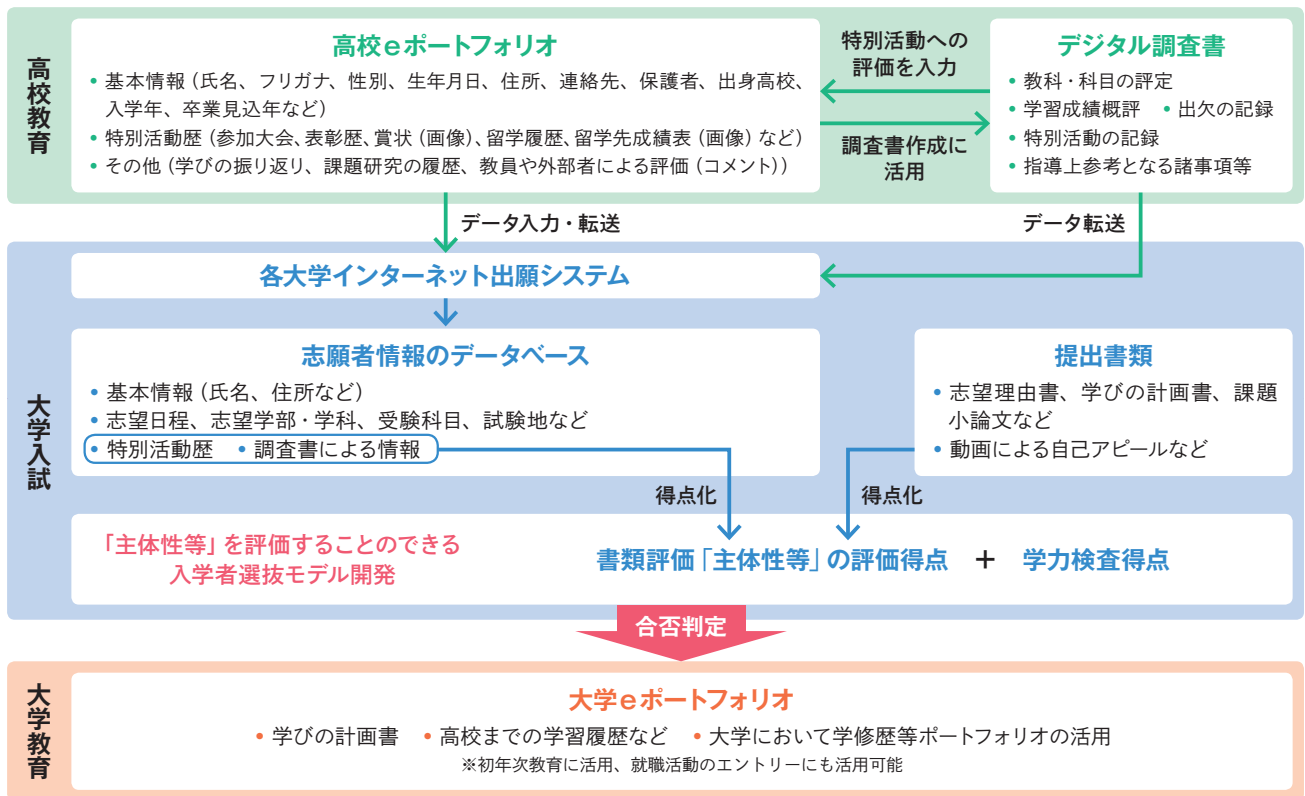
また、高校までの学習履歴等を大学教育における初年次教育に反映し

たり、大学での学修歴等を就職活動におけるエントリー時に活用したりすることも考えられている。紙ベースでの記録・保管に比べて、eポートフォリオは、情報の編集や統合が容易で、保存されたデータは劣化せず、写真や映像などの大容量のデジタルデータも記録できる。さらには、学校内外からのアクセスが可能で、これまでよりも情報共有がしやすくなる。高校3年間の指導について、不断の改善を図っていく上でも、生徒一人ひとりの情報や資料を効率・効果的に管理できるeポートフォリオの導入は、今後さらに加速するのではないだろうか。

\*

ここまで見てきたように、生徒の資質・能力を適切に測る上で多面的評価の推進が必要であり、大学入試もその方向で改革が進められている。では、実際に多面的評価を推進・実践している教師は、多面的評価をどのように捉え、どのような点に留意しているのだろうか。次ページからの現場教師と識者の語り合いや、多面的評価に取り組んでいる学校の実践事例を通して見ていく。

図4 ICTを活用した「主体性等」を評価する一般選抜のモデル



\* 文部科学省「高大接続改革の進捗状況について1」(2016年8月)を基に編集部で作成

# 生徒の資質・能力を引き出し、可能性を広げる多面的評価とは

高大接続改革で目指す資質・能力の育成を実現する上で求められるのが、多面的評価だ。

中でも、ペーパーテストだけでは測りづらい「思考力・判断力・表現力」や「主体的に学習に取り組む態度」などの資質・能力の適正な評価においては、多面的評価の視点が特に求められる。

ここでは、多面的評価に取り組む3人の教師の話から、

多面的評価の意義とそれを実践する上で留意すべき点について考えていく。

## 生徒の隠れた力が見えることで教師のモチベーションが高まる

**編集部** 多面的評価を行うことの意味は何だと思われませんか。

**牛来** いわゆる学力の3要素を適正に評価することだけではな

く、多面的評価によって、教師の生徒理解が深まり、指導への意識が高ま

ります。授業や学校行事、委員会活動や部活動、ボランティア活動な

ど、様々な場面で生徒の活躍に目を向け、それらを評価の対象とするこ

とで、ペーパーテストだけでは見えない生徒の隠れた力や可能性が見えてきます。そうした生徒の姿を間近に見た教師は、その力をもっと伸ばそうと考え、生徒への支援が前向きなものに変わります。そういった指導が生徒の自己肯定感の向上に結びつき、日常生活や将来への意欲を高めていく……そのような相乗効果によって、生徒も教師も生き生きとし、学校全体が活性化していくのです。

**中野** 実際、教科指導に多面的評価

を取り入れたところ、生徒の授業に向かう意欲や態度が変わりました。

地理歴史・公民は事実的内容を学習するので、それに関心がないと「暗記すればよい」といった態度になり

がちです。しかし、授業の前に評価

の観点を記したルーブリックを生徒

に示し、今の時代に必要な力は何か、

そのために授業でどういった力を育

んでいくのかを伝えることで、授業

は教師から知識を与えられるだけの

場ではなく、自分の資質・能力を伸

ばし、認められる場であることを、

生徒は理解します。生徒の中に授業

に対する構えができるため、自分の

強み・弱みは何か、どこを伸ばせば

よいのか、自分がグループに貢献で

きることは何かを考え、授業に前向

きに取り組むようになります。

**進藤** これまで多くの高校が、ペー

神戸大学  
アドミッションセンター  
特命准教授  
**進藤明彦**  
しんどう・あきひこ

岡山県公立高校教諭  
(生物)、科学技術振  
興機構理科教育支援  
センター主任アナリス  
トを経て、現職。



ーパーテストの点数や進学実績を上  
げることが強く求められ、それらの  
指標で教育活動が評価されることが  
多かったと思います。教科外の活動  
の評価や知識・技能以外の資質・能  
力にまで意識を向けにくかった状況  
が、今回の高大接続改革によって変  
わり、知識偏重の教育から脱却する  
最大の好機になることを、お二人の  
話を伺って改めて感じました。

## 周りの生徒に刺激されて 一歩を踏み出す

**編集部** 多面的評価をどのように

行っているのか、実践内容を教えてください。

**牛来** 本校では、社会や人生への向き合い方、価値観などを学ぶ機会として、1・2年生で年2回、3年生



東京都立町田高校  
統括校長  
**牛来峯聡**  
ごらい・みねとし

教職歴 35年。同校に赴任して3年目。東京都教育委員会などを経て、現職。

**東京都立町田高校**

- ◎ 2007年度から東京都教育委員会「進学指導特別推進校」の指定を受け、海外研修、調査研究活動、理数教育の充実などに力を入れ、「未来に向けた人づくり」を図る。
- ◎ 設立 1929（昭和4）年
- ◎ 形態 全日制・定時制／普通科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約300人
- ◎ 2017年度入試合格実績（現浪計）  
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京工業大、一橋大、大阪大などに54人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ776人が合格。
- ◎ URL <http://www.nachida-h.metro.tokyo.jp/zen/indexa.htm>

で年1回の「教養講座」を行っています。この種の講演会は話を聞いて感想を書く程度でしたが、それでは時間が経つと講演直後の感動を忘れてしまい、生徒の中に何も残らない



福岡県立折尾高校  
進路指導部  
進学指導課長  
**中野孝太**  
なかの・こうた

教職歴 13年。同校に赴任して3年目。担当教科は地理歴史・公民。

**福岡県立折尾高校**

- ◎ 商業系2学科、家庭系1学科を擁する専門高校。実学を重視し、企業と連携した課題解決型学習を行う。福岡県立学校「新たな学びプロジェクト」研究開発校。
- ◎ 設立 1956（昭和31）年
- ◎ 形態 全日制／総合ビジネス科・ビジネス情報科・生活デザイン科／共学
- ◎ 生徒数 1学年約240人
- ◎ 2017年度進路実績（現役のみ）  
4年制大学は、北九州市立大、近畿大、福岡大、立命館アジア太平洋大などに延べ34人が合格。短大、専門学校進学98人。就職95人。
- ◎ URL <http://orio.fku.ed.jp/Default2.aspx>

と感じていました。そこで、この「教養講座」では、講演後に生徒が話し合い、また書くことで自分の考えを整理する機会を多く設けました。

まず、各自でワークシートに整理した講演の論点を基に、自分の考えを400字でまとめます。その上で、グループで話し合いをしたり、講演者との質疑応答を行ったりします。そして、学年全体で共有したい内容は、「教養講座通信」に掲載します。教師は、その一連のプロセスを通して、生徒の変化や努力を見取り、400字のまとめを読んで「自分の意見を持つことができているか」を3段階で評価します。その方法に変えてからは、講演者に質問する生徒が増え、一步を踏み出せなかった生徒も周りの生徒に刺激されて、主体的に取り組むようになりました。

**中野** 私は、毎回の授業で生徒に振り返りシートを書かせ、単元末と学年末にはそれぞれ自己評価を行います。さらに、学期に1回、パフォーマンス課題で他者評価の機会も設けています。授業での自己評価は、毎回すべての観点を振り返ると時間がかかるので、観点を絞って評価させています。

## 自己評価と他者評価の両方で、自己を客観視させる

**編集部** 評価を行う際には、どのような点に注意されていますか。

**中野** 授業における評価で特に注意しているのは、自己評価と他者評価の両方を行うことです。自己評価をさせることで、以前と比べてどうだったのか、過去の自分との差異を認識し、新たな目標や課題を持って学習に取り組むようになります。また、自己評価でよい評価をつけた生徒が、単元末に行うグループ課題後の相互評価において、メンバーから「もっと頑張ってたほしかった」といった厳しい評価をもらうこともありま。他者からも指摘を受けることで、自己と他者の認識の違いに気づき、自分をより客観視できるようにになります。

そして、教師が主体性や協働性を測る際、発言の回数などだけで評価しないように気を付けています。発言の頻度や声の大きさを基準にしてしまうと「言ったもの勝ち」になるからです。教師間でしっかり評価基準を定めて、記述や発言の内容、行動などから生徒の変容を捉えること



多面的評価は、生徒の  
資質・能力を引き出し、  
意欲的に取り組む姿勢を育む

牛来峯聡

が大切です。

**牛来** 管理職として意識しているのは、教師間のベクトルを合わせることです。本校では2017年9月、育てたい生徒像を明確にして従来の取り組みを整理したブランドデザインを示しました。これまでの本校の取り組みを整理し、それぞれの目的や目標を明確にしただけなので、先生方は問題なく受け入れてくれたと思っています。仕事を増やすのではなく、それぞれの取り組みの実効性を高めることで教育活動の底上げを図りたいと考えました。

また、個々の活動を充実させるためには、従来の枠にとられず組織を再編することも必要だと考え、前述の教養講座の担当は、新分掌組織の「調査研究・研修部」としました。多忙な担任団に代わって準備を進め、3段階の評価基準についても担任と情報を共有しながら行ってい

ます。それぞれの組織に役割を与えることで、責任を持って学校を動かそうとする先生方の意識が高まり、取り組みは軌道に乗りました。

**進藤** 多面的評価の実践がうまく行われている学校では、管理職やミドルリーダーが先生方を引っ張り、ビジョンを全校で共有しています。一部の教師だけで育みたい資質・能力やルーブリックを考えて提示すれば、ほかの教師は楽かもしれません。が、いま一つ腑に落ちなかったり、考え方に違いがあったりして前向きに取り組めないといった状況になりかねません。

最初は時間がかかっても、生徒にどのような資質・能力を育みたいのかを議論し、部活動ではこの資質・能力、「総合的な学習の時間」ではこの資質・能力といったような共通理解を持てれば、あとは具体的な評価指標をつくるだけで各活動をス

ムーズに進められると思います。

多様な資質・能力を身につけた  
その先に大学入試がある

**編集部** 高校時代までに多様な資

質・能力を培った高校生が増えていく中で、大学ではどのように求める人材を選抜していくのでしょうか。

**進藤** 先生方の中には「高校で多面的評価を行っても、大学入試ではその結果をしつかり見てもらえないのではないか」「一般入試に多面的評価は関係ないのではないか」といった不安や疑問をお持ちの方が少なくないかもしれません。文部科学省は、推薦・AO入試だけではなく一般入試でも多面的・総合的評価を求める方向で動いています。

本学でも、推薦・AO入試で得た多面的・総合的評価による選抜のノウハウを一般入試に生かすことを考えており、19年度入試から7学部でAO型の「志」特別入試」を実施します。例えば、国際人間科学部環境共生学科では、1次選抜で調査書・活動報告書などの書類審査や、大学で学ぶ上で必要となる基礎学力を測る総合問題、大学教員の講義を聴講

してのレポート作成を課し、2次選抜でポスタープレゼンテーション・小論文と面接・口頭試問を行うという選考プロセスにして、受験生の資質・能力を多面的・総合的に評価する予定です。

**中野** 推薦・AO入試では、どの大学でも小論文や面接、プレゼンテーションなどが重視されています。主体性や思考力を伸ばすだけでなく、それらの資質・能力を表現できる力も身につけておかなければ、入試では通用しない可能性があります。

**牛来** 講義の聴講後にレポートを作成するという形態は、本校の教養講座に通じるものがあります。高校と大学がそれぞれ多面的評価について真剣に考えるほど、高校における評価のあり方と大学が求める学生像は一致するのだと改めて感じました。

ただ、私たち高校教師は、大学入試を過度に意識して教育活動を変えろといった事態は避けるべきだと思います。20年後、30年後の社会で必要とされる人材を育むために、高校はどのような教育活動を展開すべきかという視点を持ち続けながら、多面的評価を実践する中で、生徒に多様な資質・能力を発揮させたいと考



時間がかかっても、どの活動で  
どのような資質・能力を育むのか、  
教員間で共通理解を得ることが大切

進藤明彦

えています。その結果、多様な資質・能力を身につけた生徒が、大学が用意している多様な入試に対応できるというストーリーを描くことが、高校に求められる役割だと思います。

**進藤** 私も、調査書や活動報告書の作成のために「資格取り合戦」となるのは避けなければならぬと考えます。「『志』特別入試」では高校時代の活動実績の記入欄を5つにしましたが、それは、活動実績が多ければよいというわけではないという本学からのメッセージです。

**牛来** 活動履歴を残すことが多面的評価だと捉えられると、非常に狭い教育活動になってしまいます。多面的評価は、生徒の資質・能力を引き出し、何事にも意欲的に取り組める人材を育成するための取り組みの1つです。そのためにも、長期的な視点で生徒の変化や成長を見取り、評価する必要があります。そこで、本



自己と他者による両方の評価を  
行うことで、多くの気づきを得て、  
自分を客観視できる

中野孝太

校ではeポートフォリオの活用を強化していく予定です。高校時代のあらゆる活動の履歴を、ICTを使ってポートフォリオとして蓄積し、複数回振り返らせることで、生徒が自らの成長や変容をメタ認知(\*)できるようになります。学校や教師には、そうした機会や環境をつくり、活用することが求められるでしょう。

### 学校全体でビジョンを共有することが大切

**編集部** 多面的評価を行う際に取り  
組むべき課題を教えてください。

**中野** 多面的評価を一部の教師だけで行うのは限界があり、学校が一丸となって取り組む環境を整えなければなりません。そのためには、町田高校のように先生方がビジョンを共有し、ベクトルを合わせる必要があります。と思います。

進学校の場合は、大学入試の変化という危機感を共有できるかもしれません。しかし、本校のように大学進学希望者の方が少ない学校では、入試改革といった外的要因だけでは、生徒も教師もなかなか変化しにくいものです。「社会で求められる資質・能力とは何か」という根本をしっかりと議論し、教師が思いや目標を共有することが大切だと思います。本校も動き出したばかりですが、今後は育てたい生徒像を土台に、進路学習や課題研究など、多様な活動を評価するルーブリックを整備したいと考えています。

**牛来** 多くの先生方が、多面的評価の必要性を理解しています。しかし、評価に時間が取られ、特に教科指導に影響が出るのではないかといった不安があるようです。また、管理職も、多面的評価の導入で先生方の負担が増えることを危惧しています。そこで、管理職がリーダーシップを取り、この活動はさらに充実させて取り組ませるが、この活動は少しスケールダウンさせようといったように、教育活動にメリハリをつけることが今後ますます必要になると思います。これまでの教育活動を振り返り、学校のグランドデザインを明確に描くことが求められています。

一方で、多面的評価とは具体的にどのようなものなのかが見えていない教師が少なくないのも事実です。見えないから関心が持てない、関心がないから取り組まないというわけです。ですから、それが見えてくれば現場の先生方も動きやすくなると思います。多面的評価の意義や具体的な実践事例を先生方に伝わるよう情報発信していくことが、我々管理職や中野先生、進藤特命准教授のように、多面的評価の必要性を理解している先生方の役割だと思います。

\* 自らを俯瞰的・客観的に捉えること。

# ルーブリックによる自己評価と教師の評価が 自己を客観視させ、主体的な姿勢を育む

石川県立工業高校は、2014年度から3年間、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）」の指定を受け、  
資質・能力を育成するプログラムの開発を進めてきた。17年度からは、石川県教育委員会「専門高校等における産学連携人材育成事業」の研究指定を受け、  
より生徒の資質・能力を着実に引き出し、生徒の伸びる姿を効果的に評価する手法の開発に力を注いでいる。

## 取り組みの概要

### SPHの指定を受け 評価手法の研究に着手

創立131年の工業高校である石川県立工業高校は、これまで様々な研究指定を受け、先進的な教育活動に取り組んできた。2014年度から3年間は、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール」（以下、SPH）の指定校として、4学科（\*1）が高等教育機関と連携し、「フロンティア職業人」を育成する教育プログラムを開発。続く17年度からは、石川県教育委員会の研究指定の下、SPHの研究と実践

を進化・継続させている。宮越雅一みやこしまたかはる校長はその意図を次のように話す。

「新たな教育活動を進める中で、ペーパーテスト中心の評価に限界を感じていました。また、生徒の成長に手応えがある一方、どのような資質・能力をどのような場面・方法で、どの程度伸ばしていたのか、具体的に語ることができない状況でした」

### 資質・能力を掘り下げて 目標を具体的に示す

17年度からの研究と実践は、管理職や各学科の主任等による「評価手法研究委員会」と「SPH研究室」

を中心に推進している。同校の生徒は約6割が就職し、うち9割以上は県内企業で主に技術者として働く。そこで、地域産業に活力を与える専門的職業人の育成を目指し、特に技術者としての「コミュニケーション力」「思考力」「創造力」を育むべき資質・能力とした。

次に、学力の3要素ごとに、さらに細かく資質・能力を掘り下げた（図1）。その際、授業での姿と専門的職業人としての姿のどちらかに偏らず、両者をつなぐ内容とすることを意識した。SPH研究室長の安藤欣あんと きん司先生は、検討過程をこう振り返る。「SPHでの研究と実践では、各

科の主任が求められる資質・能力の案を出し合い、議論を重ねました。完成までに半年ほどかかりましたが、研究の進展に伴い改良を重ね、17年度も継続して改善を進め、現在18版となっています」

その特徴は、資質・能力の定義から、「何ができるようにするか」を明文化し、「対応科目」まで明記した点だ。そのように資質・能力を具体的に共有することで、ルーブリックが作成しやすくなるという。

資質・能力の具体化において特に苦心したのは、「主体的に学習に取り組む態度」に関する内容だった。「主体性は内面的なものですから、

\*1 電気科、電子情報科、材料化学科、テキスタイル工学科の4学科。



石川県立工業高校  
安藤 欣司 あんどう・きんじ  
教職歴16年。同校に赴任して4年目。SPH研究室長。



石川県立工業高校  
長田 英史 ながた・ひでふみ  
教職歴23年。同校に赴任して7年目。SPH研究室。



石川県立工業高校  
本谷 克実 もとや・かつみ  
教職歴33年。同校に赴任して1年目。主幹教諭。教務課主任。



石川県立工業高校校長  
宮越 雅一 みやこし・まさはる  
教職歴37年。同校に赴任して2年目。

**石川県立工業高校**  
◎兼六園内に金沢工業学校として設立。校訓に「敬愛協和を尚ぼう、創意工夫を凝さず、矜持責任を有たう」を掲げる。「県工学びのスタンダード」では、「学力」「技術・技能」「資格・検定」の3つを柱として生徒の成長を支える。2014年度から、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（SPH）」の指定校。  
◎設立 1887（明治20）年  
◎形態 全日制/機械システム科・電気科・電子情報科・材料化学科・工芸科・テキスタイル工学科・デザイン科/共学  
◎生徒数 1学年約320人  
◎2017年度進路実績（現役のみ）4年制大学は、富山大、金沢工業大などに43人が合格。短大、専門学校進学65人、就職206人。  
◎URL <http://www.ishikawa-c.ed.jp/~kenkoh/>

図1 スーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの継続的な取り組みにおける「育む資質・能力」(2017年度)

学力の3要素	資質・能力	目標番号	何ができるようになるか	対応科目
A 基礎的・基本的な知識・技能	A1: 自由に基礎実験・製作する力	A1-1	・実験では安全に配慮して準備、段取り、機器操作できる。	工業技術基礎
		A1-2	・実験で扱う現象を科学的に理解できる。	
		A1-3	・仮説を確認したり、求める結果を得たりするために、必要な実験を行うことができる。	先端科学技術
		A1-4	・数学、理科、英語等の知識・技能を道具として使うことができる。	
B 課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等	B1: 課題を発見・設定する力	B1-1	・漠然とした問いを具体的な課題とすることができる。	先端科学技術
		B1-2	・現状を分析して課題を明らかにできる。	課題研究
	B2: 論理的・多面的に思考・判断・表現する力	B2-1	・仮説を立てて、結果を予測できる。	工業技術基礎、先端科学技術、課題研究
		B2-2	・事実と意見を区別して表現できる。 ・具体的な根拠を提示して、論理的な主張を組み立てることができる。	
		B2-3 B2-4 B2-5	・自分の考え、行動や取得した情報を、客観的に捉え評価できる。 ・自分の考えを他者へ効果的に表現し、相手を納得させることができる。 ・お互いの考えを出し合う中で、深い理解や新しい考え方に到達できる。 ・課題の解を他に求めず、自分で考え試行錯誤することができる。	先端科学技術、課題研究
B3: 自分にとって必要な情報や学ぶべきものを見いだす力	B3-1	・本質的には分かっていないことに気づき、不足している知識・技能を把握できる。	課題研究	
	B3-2	・課題解決の糸口につながる可能性のある情報や資料を見つけ出すことができる。		
C 主体的に学習に取り組む態度	C1: 科学技術に関心を持つ力	C1-1	・目標達成に必要なことや関連しそうなことを、科学技術から選び出し学び取ろうとすることができる。	工業技術基礎、先端科学技術、課題研究
		C2: 高いモチベーションを保つ力	C2-1	・知らない科学技術に直面しても分からないことに耐えることができる。
	C2-2 C2-3		・経験や考え方の違いを乗り越え意思疎通を図ろうとすることができる。 ・知識を得ることで満足するのではなく、真理を探究することを楽しみを感じることができる。	先端科学技術
	C3: 自らの意思で行動を起こす力	C3-1	・「未知の内容を知りたい」「困難を伴うが実現したい」または「新たなものを創造したい」という思いから自分で行動を起こすことができる。	課題研究

\*学校資料を基に編集部で作成

行動として見えにくいものです。毎年度末に生徒の姿を振り返り、より適切で分かりやすい記述を求めて検討を重ねています」(安藤先生)

授業づくりの工夫

資質・能力を発揮し、主体性を引き出すよう授業を工夫

同校では、目に見えない資質・能力を育てるためには、パフォーマンス評価を組み込んだ授業づくりが不可欠だと考えている。

「ある学習において『このようなパフォーマンスが見られたら、この資質・能力が育っている』と推測し、それが身についているかを生徒個々の姿から判断します。そのためには、まず、生徒が資質・能力を十分に発揮できる活動を授業に取り入れなければなりません」(安藤先生)

その中心となるのが、1年次「工業技術基礎」、2年次学校設定科目「先端科学技術」、3年次「課題研究」の4学科共通の授業だ(P.14図2)。また、次のような工夫もしている。

◎高等教育機関との連携

「先端科学技術」の授業では、北陸先端科学技術大学院大学の大学

図2 各学科の授業の概要

科	教育プログラム
機械システム科*	PBL手法を活用した問題解決型の活動(金沢工業大学との連携)
電気科 電子情報科 材料化学科 テキスタイル工学科	SPH事業での取り組みを継続(北陸先端科学技術大学院大学との連携) <ul style="list-style-type: none"> <li>1年次科目「工業技術基礎」における先端技術につながる基礎実習</li> <li>2年次学校設定科目「先端科学技術」におけるゼミナール活動</li> <li>「先端科学技術」におけるプロジェクト活動I(研究提案書作成)</li> <li>3年次科目「課題研究」におけるプロジェクト活動II(研究報告書作成)</li> </ul>
工芸科*	合評会を含めた工芸作品制作活動(地元の工房との連携)
デザイン科*	ティーバッグのリデザインなどのアイデア発想活動(金沢美術工芸大学との連携)

\*機械システム科、工芸科、デザイン科は、2017年度からの取り組み。\*取材を基に編集部で作成

院生がゼミナール活動などに参加し、大学で最先端機器を用いた実験を行ってきた。また、金沢工業大学革新複合材料研究開発センターや東京大学先端科学技術研究センターとは、施設見学などで連携してきた。

◎「県工Thinking Time」の導入

「県工Thinking Time」は、すべての授業で必ず5分間は行う活動で、教師は、黒板に「県工Thinking

Time」と書かれたシートを貼って意識づけした上で、別の視点での考察や新たな疑問が生まれるような発問をし、生徒に深い思考を促す。

「教科書の例題を解き、板書をノートに書き写すことが勉強だと思っっている生徒の意識を変えるのが、『県工Thinking Time』のねらいです。既習事項を結びつけて新たに考えたり、疑問を自ら調べたり、話し合っ

て発表したりといった経験を積むうちに、主体的に考えることの大切さに気づいていきます」(安藤先生)

◎学び合いを重視

「先端科学技術」でのゼミナール活動など、生徒が学び合いに積極的になる場面を教師が意図的に設けることで、主体的に考えを出し合うトレーニングを重ねる。

評価方法の開発

目に見える姿を根拠としてルーブリックに基づいて評価

教務課が中心となり、外部の識者の助言も受けながら各科目のルーブリックの開発にも力を注いだ(図3)。各項目はP.13 図1の「目標番号」と対応させ、各科目で育む資質・

能力がひと目で分かるようにした。

年度の最初の授業では、生徒にルーブリックの内容を説明し、毎回の授業では、冒頭にルーブリックから本時の学習に該当する評価項目を提示し、生徒に授業を通して身につく資質・能力を意識させる。

教師による評価は、授業中の発言や記述の内容など、目に見えるパフォーマンスを根拠とし、ルーブリックを基に行う。当初は学期末にまとめて評価していたが、今は活動の区切りに評価するようにした。

「評価を授業改善に効果的に活用するために、どのタイミングで評価を行うべきかを試行錯誤してきました。ある科目では授業ごとに評価していましたが、授業改善にうまく活用できなかったという反省から、現在の形に落ち着きました」(安藤先生)

パフォーマンス評価では自己評価も必ず実施

評価の際は、必ず生徒の自己評価も行う。

「今どれほど資質・能力が身についているか」など、自分の姿を振り返る内省的な力を育てることも、パ

フォーマンス評価のねらいの1つです。メタ認知は、社会人になってからも自分自身を高めていく上で欠かせない力であり、人を育てたり評価したりする立場になった時にも必要になると考えています」(安藤先生)

自己評価を何度も行い、内省的な力が高まるにつれ、自分を客観視できるようになる」と、SPH研究室の長田英史<sup>ひでふみ</sup>先生は説明する。

「最初は、大半の生徒が『実験に失敗したから目標未達成』などと判断します。しかし、自己評価を繰り返すうちに、求められているのは実験の成否ではなく、自ら考えて実践し、論理的に考える力だと理解していきます。そのようにして、生徒は授業で身につけるべき資質・能力を自覚するようになり、学習プロセスの大切さに気づいていきます」

17年度は、ルーブリックの書式を変更し、生徒が自己評価とその理由を記入するスペースを設けた(図3)。数値だけの自己評価に比べ、より内省的に自分を捉えることになり、教師は生徒が書いた理由を見て、より支援しやすくなった。

また、同じ用紙に教師による評価と自己評価が並ぶと、両者の差に目

図3 「課題研究(プロジェクト活動Ⅱ)」の評価シートとルーブリック(2017年度)

目標番号	自己評価			教員による評価		
	A	B	C	1学期末	2学期末	3学期末
B1-2	ゴールから逆算を広げると、ゴールから逆算するプロセスを構築して、目標に到達するプロセスやスケジュールを決めることができる。	ゴールから逆算して、目標に到達するプロセスを構築し、スケジュールを決めることができる。	ゴールから逆算して、目標に到達するプロセスを構築することができない。			
B2-1	仮説-検証のサイクルを何度も繰り返して、仮説を立てて、結果を予測できる。	仮説を立てて、仮説を立てることができない。				
B2-2	具体的な根拠を示して、論理的な主張を積み立てることができる。	論理的な主張を積み立てることができる。	論理的な主張を積み立てることができない。			
C1-1	自分の考えや行動を整理し、その内容を、科学技術から選び出し、書くことができる。	自分の考え、行動を整理し、その内容を、科学技術から選び出し、書くことができる。	自分の考え、行動を整理し、その内容を、科学技術から選び出すことができない。			
C2-1	知らない科学技術に直面しても、分からないことに耐え、積極的に学習に向かうことができる。	知らない科学技術に直面しても分からないことに耐えることができる。	知らない科学技術に直面しても分からないことに耐えることができない。			
C3-1	「未知の内容を知りたい」「困難を伴うが実現したい」または「新たなものを創造したい」という思いから、積極的に行動を起こすことができる。	「未知の内容を知りたい」「困難を伴うが実現したい」または「新たなものを創造したい」という思いから、積極的に行動を起こすことができる。	「未知の内容を知りたい」「困難を伴うが実現したい」または「新たなものを創造したい」という思いから、行動を起こすことができない。			

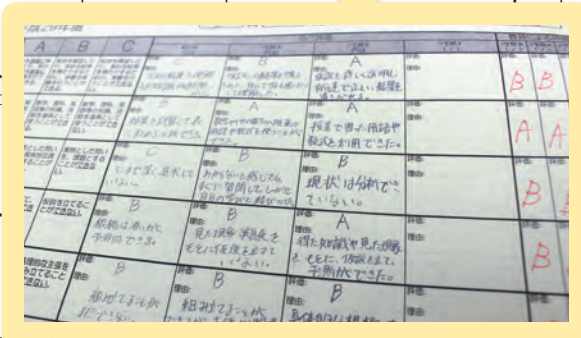


写真1 評価シートの記入例。自己評価の理由を考へることで、自分に足りない資質・能力を意識し、次の活動の目標が自然と生まれる。自己評価の精度が高まると、厳しい評価になる傾向があるが、それが学習意欲を喚起し、大きく成長する生徒もいるという。

P.13 図1の「育む資質・能力」の目標番号を、ルーブリックに対応させて、この科目で育む資質・能力をひと目で分かるようにした。  
\*学校資料を一部抜粋して掲載

がいく。それが、生徒だけではなく、教師にも好影響を及ぼしている。「教師の評価と生徒の自己評価をすり合わせることは大切です。差異

がある時は、生徒にとってでは自分を見つめ直すチャンスに、教師にとっては指導方法や評価手法を振り返るチャンスとなります」(安藤先生)

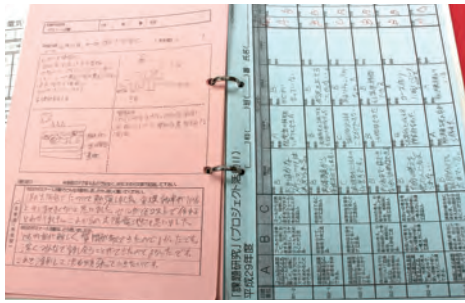


写真2 学校設定科目「先端科学技術」のポートフォリオ。区別しやすいよう、ワークシートはピンク、ルーブリックは青のように、用紙の色を分けた。また、リングファイルにして、資料を効果的に整理・活用できるようにした。

**授業では見えづらい姿をポートフォリオで見取る**  
 パフォーマンス評価では、ポートフォリオも活用する。科目ごとにファイルを用意し、ワークシートやルーブリック、自己評価、スケジュールなどを整理してとじる(写真2)。「1年間の学習の流れが分かり、生徒は学習の履歴を振り返りやすくなります。3年次の課題研究で取り組みたいテーマを語る上でのよりどころにもなり、次の学びに結びついています。また、年度の後半では、分厚くなったファイルを見て『こんなに勉強したのか』と誇らしげな生徒の姿に、授業への満足度を高めている様子が見えます」(安藤先生)

「教師は皆、ペーパーテストでは測り切れない力があることは理解しており、各自で指導や評価を工夫していましたが、それを言語化する機会がありませんでした。その意味で、

まず、生徒の多くがパフォーマンス評価をすんなり受け入れたのとは対照的に、初めての取り組みに戸惑いを見せる教師が少なくなかった。そこで、教務課主任の本谷克実先生は、次のように呼びかけたという。「教師は皆、ペーパーテストでは測り切れない力があることは理解しており、各自で指導や評価を工夫していましたが、それを言語化する機会がありませんでした。その意味で、

**全校へのパフォーマンス評価の導入**  
**導入のハードルを下げ教師の戸惑いをなくす**  
 17年度からは、パフォーマンス評価を全学科に拡大して実践しているが、そこに至るまでには様々な課題があり、SPH研究室や教務課が中心となって取り組んできた。

ルーブリックは新しいものではなく、今までの実践を言語化する試みと説明し、とにかく取り組んでみようと呼びかけました。導入後は、ルーブリック活用の意義を理解して意識が変わるのと同時に、大変さにも気づき、様々な意見が出てきました」

また、パフォーマンス評価を想定した授業を実施していない段階でルーブリックを作成したため、生徒の姿を想像しながらの作業となった。そのため、現実とはずれが生じる面があった。

「生徒がどれほどのパフォーマンスを発揮するのが未知数で、目標を設定しかねました。また、教務課が原案を作成したため、実際に使用する教師の感覚と多少のずれがありました。そこで、2年目以降、実際の生徒の姿に重ね合わせながら修正していきましました」(安藤先生)

## ルーブリックを生徒が理解しやすい記述に修正

ルーブリックの記述では、教師が当たり前に用いる表現を、生徒が理解できないことが多々あったという。

「例えば、『本質を理解できる』『ゴールを見極めることができる』

という記述に、生徒から『本質やゴールとは何ですか』と質問されました。ルーブリックの内容を理解していなければ自己評価は意味をなしませんから、改訂が必要でした」(長田先生)

さらに、汎用性を持たせようと大括りの表現としたが、生徒がルーブリックを読むだけでは具体的にイメージできず、説明に多くの時間を要した。そこで、生徒の目線で、より具体的な場面を盛り込むよう心がけた。改訂を繰り返すうちに、例えば「実験で扱う現象を理解できる」といったように、「実験で」と場面を具体的に説明するだけで、生徒は想像しやすくなると気づいたという。

5段階評価を、17年度から3段階に変えたことも、大きな改善の1つだ。5段階では、各段階の内容に違いを出す必要から記述が長くなり、教師によって評価にぶれが生じた。さらに、生徒が5段階それぞれの内容を理解し、自己評価の判断に苦勞する姿も見られた。そこで、3段階に変えて、各科目の到達目標は「B」で統一し、記述は端的で分かりやすい表現にして生徒に示した。

## 成果と展望

### 主体的な姿勢が定着し、発言や会話の質が変化

資質・能力を育む指導と評価が定着するにつれ、生徒には主体的に考える姿勢が根づきつつある。

「実験時に生徒から『もつと知りたい』と言われたことが心に残っています。これまでは答えや結果をすぐに求める生徒が目立ちましたが、パフォーマンス評価を取り入れてから、疑問を持つことや不思議に感じるこの大切さに、多くの生徒が気づいたのだと感じます」(長田先生)

授業中の生徒からの質問が増えたことも、変化の1つだ。

「主体的に考えているからこそ、質問したいことが出てくるのでしょ。関心・意欲の高まりの表れと捉えています」(宮越校長)

さらに、授業や日常生活において、例えば、自分の考えを主張する際、理由や根拠を必ず言うようになるなど、論理的な思考力や表現力の高まりが垣間見られるようになった。

パフォーマンス評価の実践を通して、教師の授業観も変わりつつある。「以前は活動を重視する一方で、

生徒にどのような資質・能力を身につけさせるのかという観点が弱かったと思います。今では『この資質・能力をつけるために、どのような活動をすべきか』といった発想で授業をするようになりました」(安藤先生)

また、授業中に生徒が資質・能力を十分に発揮できるよう、ファシリテーターとしての教師の役割を強く意識するようになったという。

今後の課題は、専門教科にとどまらず、普通教科でもパフォーマンス評価を行うことだ。

「普通教科の担当教師に、専門教科の授業を見てもらい、パフォーマンス評価を通してできることを共有することが、最初の一步になるでしょう。そして、どの活動でもよいので、ルーブリックを作り、評価してみることで、活用への理解が深まると考えています」(本谷先生)

そして、いかに学校全体に根づかせるかがポイントだと捉えている。「7学科での取り組みは端緒に終わったばかりです。学科の垣根を低くして、生徒や教師の交流を生み出すことで、一層研究を深めたいと思います」(宮越校長)

実践事例2

静岡県立御殿場南高校

# 複数の教師による評価や生徒同士の相互評価で、自己理解を促し、多様な資質・能力を育む

静岡県立御殿場南高校は、教科学習や部活動、キャリア教育など、あらゆる教育活動を「Cプロジェクト」として体系化し、生徒の人間的な成長を総合的に支えている。3年間を通して、生徒に気づきを促す教師の働きかけや生徒同士の相互評価など、形成的評価に重点を置き、生徒の客観的な自己理解を助け、多様な資質・能力を育てている。

取り組みの概要

あらゆる教育活動を

「Cプロジェクト」として体系化

静岡県立御殿場南高校は、「地域に貢献する優れた人材を集い育成する」という意味である「鍾駿しょうしゅん」を建学の精神に掲げる。その実現に向け、2013年度から「Cプロジェクト」(CはCareer・Challenge・Creativityの頭文字。以下、プロジェクト)に取り組んできた。進路指導主事の樋口ゆり子先生は、当時の生徒の姿を次のように振り返る。

「本校の生徒は、積極性や主体性に課題が見られ、潜在能力が十分に

あっても、それを発揮し切れていませんでした。また、人間関係づくりに消極的な生徒も目立ちました」

そこで、生徒の人間的な成長を促そうと考え、教育活動全体を体系化した。1学年主任の望月満子先生は、プロジェクトのねらいをこう語る。

「生徒の将来を考えて行っていた取り組みを体系化させることで、さらに大きな教育効果が得られると考えました。教科学習や学校行事、キャリア教育、部活動、生徒会活動など、あらゆる教育活動を有機的に結びつけ、生徒の生涯の成長を見据えた指導に発展させることを目指しました」

プロジェクトでは、まず教師間で目指す生徒像を共有しようと、文部科学省がキャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力として示した4領域(\*1)を基に、同校の実態を踏まえて、育成すべき資質・能力を具体化。それらの資質・能力の育成に向け、各学年や各教育活動における指導目標を設定した(P.18図1)。

生徒の成長を促すための形成的評価を重視

17年度には、静岡県教育委員会「ネオアドバンススクール」の指定を受け、早稲田大学・日向野幹也教授の

指導の下、プロジェクトにリーダーシップ教育を組み込み、一層の充実を図っている。キャリア教育主任の平井剛先生はそのねらいをこう語る。

「リーダーシップを身につけることで、生徒は目標共有・率先垂範・同僚支援の3要素を意識した行動を取れるようになり、教科学習だけでなく、学校行事や部活動など、教育活動全体で主体的・対話的で深い学びができるようになると考えています」

プロジェクトの軸となる活動は、「総合的な学習の時間」に行う「鍾駿ゼミ」だ。1年次では「社会を知る」をテーマに職場訪問や大学訪問、2年次では「他者を知る」をテーマ

\*1 「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4領域となる。

## 静岡県立御殿場南高校

◎校訓は「心は広く豊かに、志は高く大きく、日々の努力を惜しまない」。知力、精神力、体力に優れたリーダーの育成を目指し、「文武両道」の教育活動を実践。生徒が地域でのボランティア活動に積極的に取り組む伝統がある。

◎設立 1963（昭和38）年

◎形態 全日制／普通科／共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度入試合格実績（現役のみ）  
国公立大は、筑波大、横浜国立大、山梨大、静岡大、静岡県立大などに30人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、東京理科大、法政大、明治大、立教大などに延べ402人が合格。

◎URL <http://gonan.jp/>



**平井 剛** ひらい・たくし  
静岡県立御殿場南高校  
同校に赴任して3年目。キャリア教育主任。1学年特進クラス担任。英語科。



**奥山 達生** おくやま・たつお  
同校に赴任して2年目。研修主任。理科。



**望月 満子** もろつき・みこ  
同校に赴任して8年目。1学年主任。国語科。



**樋口 ゆり子** ひくち・ゆりこ  
同校に赴任して6年目。進路指導主事。理科。



**櫻井 教文** さくらい・けんぶん  
同校に赴任して1年目。

図1 「Cプロジェクト」の概要

### キャリア教育で育成すべき資質・能力（基礎的・汎用的能力）

#### 人間関係形成・社会形成能力

- 他者の意見をしっかりと聴く姿勢を身につけている。
- 他者の意見を尊重しつつ、自分の意見を述べることができる。
- 自分の役割を認識し、他者と協力してお互いを高め合う集団をつくることができる。
- 多様な人々と適切なコミュニケーションを取ることができる。
- 学校行事に主体的（積極的）に参加することができる。

#### 自己理解・自己管理能力

- 基本的な生活習慣を確立し、規則を守って生活することができる。
- 自分の個性を磨き、能力を伸ばそうとしている。
- 社会とのかかわりから自分の特徴に気づき、自分らしい生き方について考えることができる。
- 自ら決めたことに対し、最後まで責任を持つことができる。
- 自立心を持ち、場面に応じて適切に行動できる。
- 心身ともに健康で強い意志とたくましい実践力を持っている。

#### 課題対応能力

- 苦手教科の学習にも創意工夫しながら取り組むことができる。
- 時間を有効に活用できるように生活リズムを組み立て、学習とほかの活動との両立を図ることができる。
- 目標達成のために必要なことを分析し、それに対応した学習や活動を行うことができる。
- 困難なことに直面しても、最後まで努力して取り組み、解決しようとする。
- 自らの課題に気づき改善しようと努力している。

#### キャリアプランニング能力

- 働くことの意義を理解し、自分自身のあり方、生き方について主体的に考えている。
- 将来に基づいて、今行うべき学習や活動の意義を理解し、意欲的に取り組んでいる。
- 職業についての総合的な理解に基づいて将来を設計し、進路計画を立案している。
- 進路目標達成のために諦めずに粘り強く努力できる。
- 社会における自分の役割を見つけ、広く貢献しようという意志を持って進路選択している。

### キャリア教育の視点に基づく各学年の指導目標

#### 第1学年「社会を知る」

- インターンシップ、職場見学、研究所見学、高大連携等の行事を通して、社会と職業、学問、自分の適性について知り、将来設計をさせる。  
※社会とは学問等を含めた広い意味

#### 第2学年「他者を知る」

- 他者の価値観や個性を認識し受容する態度を身につけさせる。
- 修学旅行を通して責任感や連帯感を育成する。
- 目的意識を持ち、希望進路を具体的に設定させる。
- 進路実現までのプランを作成させる。

#### 第3学年「自己を深める」

- 自己の能力やその可能性、興味・関心、適性を踏まえ、卒業後の進路について具体的な目標を定め、実行に移させる。
- 進路に必要な学力を身につけさせる。
- 進路実現に向けて主体的に考え、行動し、粘り強く努力させる。

#### 教科

- 生徒の活動、理解度が見える授業を行い、生徒の主体性を育む。
- 生徒の進路目標達成のための学力の伸長を図る。
- 今の学びが、将来どのようにつながっていくのかを理解させることで、学習意欲を向上させる。

#### 総合的な学習の時間

- 体験活動や講話を通して自己の可能性や役割を理解し、主体的に進路選択できる能力を育成する。
- 発達段階に応じたプログラムを準備し、進路意識の高揚を図る。
- 3年間を通じた小論文指導計画を立案・実施することにより、自らの考えを他者に伝える力を養う。

#### 特別活動

- 集団の中での自己の位置や果たすべき役割を自覚させ、コミュニケーション能力を高める。
- 行事に積極的に参加し、成功させることによる達成感を体験させ、自己肯定感、自己有用感を持たせる。

#### 部活動

- 自己の役割を果たし、集団の目標を達成するための行動ができるようにする。
- 成果と課題を分析し、具体的な対策を考え実行できる能力を育成する。
- 活動の効率化、休養日の設置、学習時間の確保（保障）をする。

\* 学校資料を基に編集部で作成

に学部学科研究に取り組み、アメリカ・ハワイへの修学旅行などを行う。そして、3年次では「自己を深める」をテーマに、1年次からの学びを基に希望進路を決め、その目標に向けて主体的に行動する。また、1・2

年次では、各活動における経験を自分の将来に結びつけさせるために、「論文研究」を行う。プロジェクトは、そのような3年間の多様な活動を通して、生徒に気づきを促し、じっくり成長を図るも

のだと言える。生徒がより大きく成長するためには、生徒自身が自分の強みや課題を把握し、向上心を持って取り組むことが大切になる。そこで、どの活動においても形成的評価を行い、生徒が活動を振り返り、メ

タ認知をする場面を設定している。

### 1・2年次の取り組み

## 入学後のガイダンスで身につけてほしい資質・能力を説明

プロジェクトの1・2年次の取り組みを具体的にみていく。まず、1年次の4月のオリエンテーションでプロジェクトの概要と3年間で身につけてほしい資質・能力を説明する。

「生徒の多くは、大学進学を希望しています。しかし、大学合格が最終目標ではありません。高校3年間を通して、大学で何を学び、どのような人生を送りたいのかを考えてほしいと伝えます」（樋口先生）

1年次の活動は、「企業職業研究」と「大学研究」が中心となる。

「企業職業研究」では、保護者への職業アンケートや社会人講話などを通して、人生観や職業観を築いていく。夏季休業中に行う職場見学や仕事体験では、気づいたことをレポートにまとめ、それを2学期に各クラス内で発表。さらに、一連の活動を振り返り、それらをまとめて学年発表会でポスターセッションを行う。

そうして描いた将来像の実現に必

要な学びを理解するために行うのが、「大学研究」だ。自分の適性を踏まえて文理選択を検討したり、大学・学部・学科を調べたりする。12月の大学訪問では、早稲田大学・横浜市立大学・山梨大学・都留文科大・山梨県立大学のいずれかを訪れ、模擬授業を受けたり、大学生と交流したりする。この活動でも、グループごとに気づきや学びをまとめたポスターを作成し、クラスで発表する。

## 3つの観点による相互評価で自分のよい点に気づかせる

これまでも振り返りに相互評価を行っていたが、今年度から始めたのが「SBIフィードバック」(図2)による相互評価だ。グループ内でメンバーそれぞれについて「状況」「具体的な行動」「あなたに与えたインパクト」を書いて見せ合い、活動でよかった点を相互評価する。例えば、「あの場面でこんな質問をしてくれたことが、自分の思考を深めるきっかけになった」といった内容で、3つの観点を具体的に書くことでよさが伝わりやすくなり、評価される側がメタ認知をしやすくなるという。

「自分は目標にどの程度到達したのか、形成的な評価を行う場となっています。発言に消極的だった生徒が、友人によさを認められて自己肯定感が高まり、次第に積極的になる姿がよく見られますし、評価する側も、友人のよい点に影響を受けることが多いようです」（樋口先生）

同校では、他者を評価する力をリーダーシップの資質の1つと捉え、授業でもフィードバックの場面を設定している。

「担当する理科の授業では、グループワーク後、付箋紙にメンバーの評

図2 「SBIフィードバック」

\*グループのメンバーのよかった点をフィードバックする。

1人目の氏名	状況 (Situation)	具体的な行動 (Behavior)	あなたに与えたインパクト (Impact)
コメント			
2人目の氏名	状況 (Situation)	具体的な行動 (Behavior)	あなたに与えたインパクト (Impact)
コメント			
3人目の氏名	状況 (Situation)	具体的な行動 (Behavior)	あなたに与えたインパクト (Impact)
コメント			

「SBI」は、「状況 (Situation)」「行動 (Behavior)」「影響 (Impact)」の頭文字。米国リーダーシップ教育機関のCCLが開発。\*学校資料をそのまま掲載

価を書き、よさや改善点を伝え合っています。1年生でも、フィードバックを繰り返すうちに、他者を評価した内容を的確かつ具体的に伝えられるようになります」（樋口先生）

## 論文作成で経験が自身の成長にどう関連しているか気づかせる

プロジェクトにおける活動を関連づけ、自身の成長を振り返り、将来を考えさせる場が「論文研究」だ。1年次の5月、「SDGs」(※2)の17の目標について説明し、自分がかかわりたい目標をテーマに1年間かけて論文を作成させる。

「論文には、職場訪問や大学訪問などの経験、そこでの気づきや学びを積極的に盛り込むように指導します。多様な教育活動が自分の成長に関連し合っていることに気づき、どのような資質・能力が伸びているのかを客観的に把握し、認識する場になっています」（平井先生）

論文作成の途中では、生徒同士で読み合い、感想を述べたり、質問し合ったりする場を何度か設け、相互評価を行う。2月には完成させ、学年発表会でその概要を発表し合う。

\* 2 Sustainable Development Goals の略。2015年9月の国連総会で採択された『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』で示された具体的な行動指針。「あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」など17の目標がある。

2年次では、1年次での学びを通じて見えてきた将来像を基に「学部学科研究」を行い、夏季休業中に志望校のオープンキャンパスに訪れる。その体験はA4判紙1枚のレポートにまとめ、廊下に貼り、生徒間で情報を共有する。10月にはハワイ修学旅行の計画をグループごとに立てる。現地では大学生との交流や文化に触れる活動を通し、「他者」を知ることで、「自己」への理解をより深めることをねらう。

「キャリアプラン表明書」作成

プロジェクトの集大成となる「キャリアプラン表明書」

1・2年次の活動の集大成が、2年次12月から取り組む「キャリアプラン表明書」(図3)だ。その作成は、それまでの活動を整理し、生徒が自分の志向性や課題を把握して、将来や進路選択を深く考える場となる。

まず、「自己分析シート」でプロジェクトでの学びを振り返り、自己理解を深め、キャリアプランを考える(図4)。その時に参考にするのが、各活動で書いたワークシートなどをまとめたレポートフォリオだ。

生徒は「自己分析シート」を冬季休業前までに提出し、担任はそれを基に個別面談をする。研修主任の奥山達生先生は次のように説明する。

「自己評価や他者評価を何度もしてきた成果かもしれませんが、多くの生徒が奇麗な文章でまとめてきまず。ただ、その段階ではほとんどが表層的・抽象的な文章です。そこで、面談で気になる点を一つひとつ指摘し、自己の内面を再度振り返らせ、自分の言葉で書くように伝えます」

その際、生徒の思考を促す質問をするよう心がける。そのために、教師の質問力を高める研修も行った。

「教師は教えるだけでなく、生徒に問いかけ、気づかせて、考えさせる指導も重視します。生徒への質問は、『イエス・ノー』などの択一で答えられるクローズド・クエスチョンや、5W1Hを問うオープン・クエスチョンを効果的に使うよう心がけています」(平井先生)

担任・学年主任・管理職による多面的評価で思考を深化させる

生徒は、面談を踏まえて内容を再考し、冬季休業中に「キャリアプラン

図4 「自己分析シート」の記入項目

I 「Cプロジェクト」全体の振り返り

- 1 仕事について：1年次の企業職業研究(企業訪問)やこれまでに聞いた講演、2年次の修学旅行におけるキャリアセミナー・プロジェクトパラダイスなどを通して感じたこと(1年次にまとめた「Cプロジェクト」のファイルを活用)。
- 2 大学について：1年次の大学訪問や、2年次の大学調べ、オープンキャンパスを通して気づいたこと、考えたこと。
- 3 論文研究(ブックトーク)：新書を読んで感じたこと、考えたこと。

II 自己理解

- 1 これまでの人生で頑張ったこと、印象に残っていること、自分にとって影響の大きかった出来事(授業、部活動、ボランティア活動、旅行など、今までの経験、体験を振り返り、できるだけたくさん箇条書きで書いてみよう。つらかったこと、乗り越えたことなど)。
- 2 上記1のことから、学んだこと、成長できたこと、自分自身の性格、自分の強み(PRポイント)など。

III キャリアプラン

- 1 大学で勉強したいこと。
- 2 自分の進みたい分野や職業をイメージしよう。また、その分野や職業の特徴は何だろうか。(できるだけたくさん箇条書きで書いてみよう)
- 3 今起きている社会問題や現代社会における課題など、知っていることを挙げてみよう。
- 4 10年後、自分が将来、かかわっていききたい分野がどのように社会に役立っているのかを書いてみよう。

図3 「キャリアプラン表明書」

The form is divided into two main sections: '裏面' (Back) and '表面' (Front).  
 The '裏面' section contains several prompts for reflection:  
 - 「社会(他者)を知る」: 自分が将来、関わっていききたい分野がどのように社会に役立っているのか書いてみよう。(問題意識の整理)  
 - 「志望校を考える」: 自分で考えた内容にこれから関わる上で、また、身につけたい知識、能力について書いてみよう。  
 - 「自己理解」: これまでの人生で頑張ったこと、印象に残っていること、自分にとって影響の大きかった出来事等を書いてみよう。  
 - 「キャリアプラン」: 上記①のことから、実行したことや学んだことを通し、どのような考えを持つようになったかを考えよう。(目標設定)  
 The '表面' section is for the final statement, with a header for '所属( ) 氏名( ) 年月日提出' and a large text area for writing.

\*学校資料をそのまま掲載

\*学校資料を基に編集部で作成

ン「表明書」の下書きを作成。担任による2回目の面談を受け、その内容を反映して清書する。そして、学年主任、続いて管理職の面談を受ける。教頭の櫻井<sup>さくらい</sup>教文<sup>のりよみ</sup>先生はこう語る。

「私が面談をする段階では、担任と学年主任の面談を通して、生徒はかなり深いところまで考えており、口頭での説明もより分かりやすいものになっています。それでも、さらなる高みを目指して、違う角度から質問をして思考を深めさせます」

そのように、複数の教師から評価を受けて繰り返し書き直し、考えに考え抜いた「キャリアプラン表明書」を完成させた生徒は、深い自己理解に基づいた目標が明確に定まり、3年生になると希望進路の実現に向け、一直線に頑張る姿が見られるという。

体制の工夫

指導方針や方法、資料など  
全教師で共有を徹底

プロジェクトでは、全校で指導方針や指導方法を共有し、3年間での一貫した指導の実現を図っている。

「教育目標や目指す学校像・生徒像、学校経営目標などの体系にプロ

ジェクトを明確に位置づけて、そのプログラムを構築しています。そのため、各活動の目的や意図の共有がしやすいと思います」(櫻井教頭)

17年度は全体研修を4回行い、外部講師を招き、リーダーシップ教育やカリキュラム・マネジメントへの理解を図った。さらに、学年間では資料の共有を丁寧に行っている。

「ワークシートなどの資料はすべてデータ化して蓄積し、共有フォルダに分かりやすく整理していることも、指導や評価方法の共有に役立っていると思います」(樋口先生)

成果と展望

自分を深く理解するからこそ  
将来を選ぶ姿勢に変化が

プロジェクトの成果は、特に生徒の希望進路に対する姿勢に表れている。例えば、「キャリアプラン表明書」では、自分がかかわりたい職業や学問分野が「どのように社会に役立っているのか」を400字程度で書く。

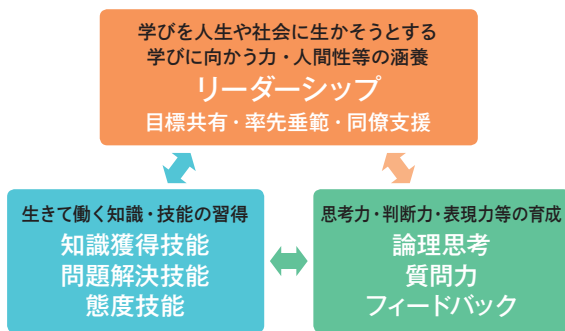
生徒は、志望分野の社会的役割を、それまでの経験から気づいた自分の適性を踏まえて考える。すると、将来への期待が一層高まり、希望進路

の実現に向けた意欲がさらに向上することもあれば、自分の適性に自信が持てず、本当に進むべき道なのかを考え直す場合もある。

そうした過程を経るからこそ、自分に最適と思う希望進路を見いだすことができる。過去には医師から看護師へ、雑誌記者から歴史学者へと、希望進路を転換した生徒がいた。

17年度は、リーダーシップ教育を導入し、実践を進める中で、「育成を目指す資質・能力」を改めて定めた(図5)。リーダーシップを資質・能力の1つと捉え、知識・技能、思考力・判断力・表現力をスパイラルで伸ばすことを目指している。

図5 育成を目指す資質・能力



\* 学校資料を基に編集部で作成

eポートフォリオを導入し、  
活動を振り返りやすくする

課題は、大学入試改革も見据えたポートフォリオの電子化だ。既に「Classi」(\*3)を導入し、生徒が活動の内容や得られた気づきをスマートフォンなどから入力できるようにした。今後、生徒が自分で成果物を撮影して保存・整理するなど、コンテンツをデータ化し、eポートフォリオにする予定だ。

「資料の保存や整理は、デジタル化した方がはるかに効率的です。もちろん、書ききかたらず学習効果もあるので、目的に応じて使い分けたいと考えています」(望月先生)

さらに、ルーブリックを用いたパフォーマンス評価を教育活動全体で推進中だ。17年度は、各教科でルーブリックを作成。プロジェクトでは生徒が学びの成果等を振り返る評価シートを導入した。18年度は教科横断、19年度は行事も含めた教育活動全体のルーブリックを作成予定だ。

「これからも『Cプロジェクト』において教育活動全体を体系的に整理し、指導と評価の改革を押し進めたいと考えています」(平井先生)

\* 3 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

## 時間目 実験計画書の作成



1班8人のグループで、重力加速度の値を測定するための実験計画を立案する。教科書を参考にしながら意見を出し合ったり、図書館の資料やインターネットを活用したりして、班ごとに実験方法や必要な器具などを考え、実験計画書を作成。授業時間内に終わらなかった班は、休み時間や放課後を利用して実験計画書の作成に取り組んだ。

## 授業 ハイライト

●3年生「物理」の授業で、「重力加速度の値の測定」をテーマとした全8時間の単元。実験計画から発表までを班で取り組む。既習事項の定着と協働性の涵養を図るとともに、科学実験の難しさを経験させる。(P. 25に授業デザインを掲載)

主体的・対話的で  
深い学びへ

## 実践 アクティブ・ラーニング

## 物理

実験の失敗を成功に導く経験から、  
研究の醍醐味を実感し、  
協働の大切さも学ぶ

### 都築先生のアクティブ・ラーニング

工学分野を志望する生徒に  
「ものづくり」を体感させたい

都築慶和先生は、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業改善の視点から、年1回、観察・実験にアクティブ・ラーニングを取り入れた研究授業に取り組んでいる。

その第一歩として、2013年度に言語活動と実験を融合させた授業を行った。まず、数班



### 愛知県立知立東高校

#### 都築慶和 つづぎ・よしかず

教職歴 20年。同校に赴任して12年目。

進路指導主事。

アクティブ・ラーニングの実践は5年目になる。

### 愛知県立知立東高校

◎校訓は「努力 一継続は力一」。愛知県教育委員会「高等学校教育課程研究指定校事業」(公民科による主権者教育)の指定校。愛知県「あいち科学技術教育推進協議会」の指定参加校として理数教育にも力を入れる。

◎設立 1986(昭和61)年

◎形態 全日制/普通科/共学

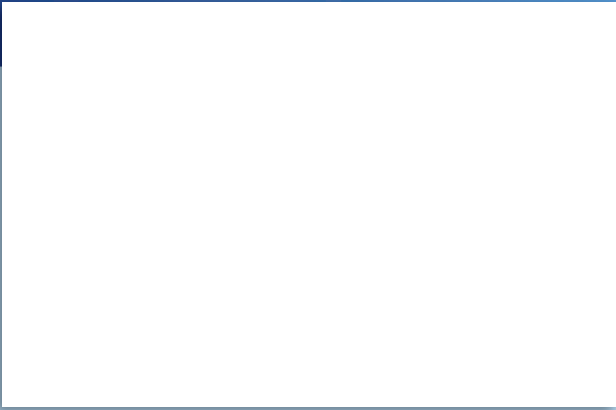
◎生徒数 1学年 360人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、東北大、東京工業大、名古屋大、愛知教育大、大阪大などに163人が合格。私立大は、慶應義塾大、南山大、名城大、同志社大、立命館大などに延べ1077人が合格。

◎URL

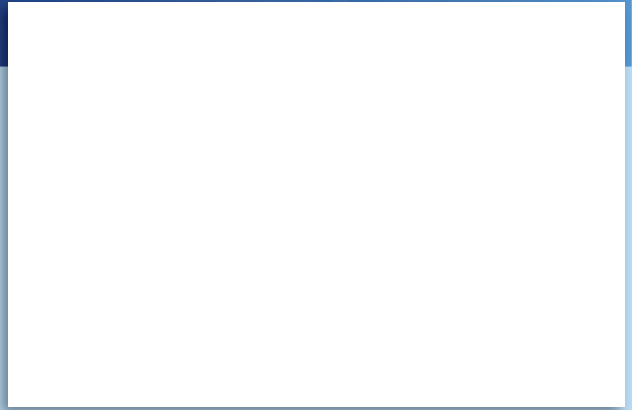
<http://www.chiryuhigashi-h.aichi-c.ed.jp/>



1回目の実験で得たデータを検証し、実験方法をどのように改善すればよいかを話し合った。1回目の実験を失敗と捉え、全く異なるアプローチで実験計画を立て直した班もあった。



教科書に書いてあるような理想的な実験環境をつくることは、実際にはとても難しいのだと実感しました。



実験計画書に基づいて実験を行う。力学的エネルギーと運動量保存則の実験や、単振り子による単振動を利用した実験、電流と磁場の関係を利用した実験など、これまでに学習した分野の知識・技能を活用した実験が行われた。しかし、ほとんどの班が仮説通りの結果を得ることができず、実験の条件を変えるなど試行錯誤する姿が見られた。

に分かれて同じ放射線実験を行う。そして、同じ手順・方法の実験にもかかわらず、班ごとに異なる結果が出た理由を生徒同士で話し合う。さらに、そこで出てきた疑問について考え、その結果を発表し合い、生徒間で相互評価を行う。この一連の活動を通して、思考力・判断力・表現力や主体性の向上を図ることをねらいとした。

2年目の研究授業は、限られた時間の中で多様な実験を経験させることをテーマとした。10人で1班となり、再生可能エネルギーに関する3つの実験に班内で分担して取り組み、各実験のプロセスと結果を共有・発表した。

今回のテーマは、15年度から研究授業で取り上げている、3年生「物理」の「重力加速度の値の測定」だ。過去の授業では、生徒に実験方法を示していたが、今回はテーマだけを示し、生徒に実験方法から考えさせるようにした。

「学校で行う理科実験の大半は、教科書に示された方法や器具が進めますが、それでは実験をこなしている状態となり、他者に任せきりにする生徒や、何の実験をしているのかを理解できていない生徒も出てきます。生徒自身が実験方法を計画し、失敗したら改善策を考えることで、より深い学びになると考えました」

3年次11月には、授業も教科書の内容がすべて終わり、生徒は物理の知識を一通り備えた状態になる。実験計画を立てるために教科書を読み返すことは既習事項の復習にもなるため、知識を統合して考える力を身につけさせるという

ねらいもあった。

都築先生が実践的な知識の習得にこだわる理由は地域性にもある。知立市は大手自動車メーカーの本社がある豊田市と隣接しており、製造業が身近で、工学部を志望する生徒も多い。

「ものづくりは1人ではできません。知恵を出し合いながら周りや協働して1つの形にしていく。将来、日本の製造業を担う生徒たちに、ものづくりとはどういうことかを、実験を通して体感してほしいと考えています」

#### 思考の活性化・深化への配慮

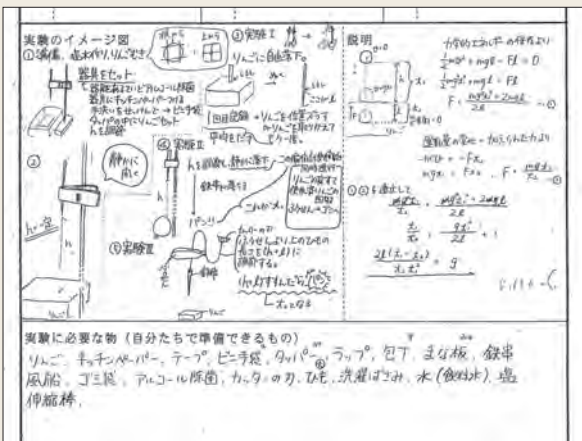
### 目の前の生徒の力を見極め、指導の内容やタイミングを変える

都築先生は、生徒の思考を深めるためにテーマ設定を工夫している。「重力加速度の値の測定」をテーマにしたのは、力学や電気など、複数の分野からのアプローチが可能であること、身近な題材であり、生徒の関心を喚起しやすいこと、身の回りの道具を使って実験できることといった理由がある。

実際、生徒は、斜面に球を転がすといった一般的な方法だけでなく、様々な実験方法を考えた。りんごにアイスピックを落とし、落下時間と刺さった深さから測定した班、ピンポン玉の浮力と重力の釣り合いから測定した班など、柔軟な発想とユニークな視点から実験方法を考え、実際に実験を行った。

2度の実験で学んだことを班ごとに発表。前時に製作したポスターを掲示したり、黒板に図示したりと、各班とも工夫を凝らしていた。都築先生が班ごとの講評を述べた後、生徒同士の質疑応答が行われた。最後に、生徒は学んだことや感じたことを各自でレポートにまとめ、一番分かりやすいと感じた発表とその理由を書いて、生徒間での相互評価を行った。

立て直した計画の下、再び実験を行った。その結果、8班のうち5班で理論値 ( $9.8\text{m/s}^2$ ) に近いデータが得られ、中でも単振り子による単振動を利用した班は、理論値に最も近い  $9.91\text{m/s}^2$  を測定した。実験結果はポスターにまとめ、7~8時間目の発表会の準備に取りかかった。ポスターやプレゼンテーションの内容は、都築先生が事前に点検し、指導した。



生徒が作成した実験計画書。メンバーが意見を出し合い、1つの計画をまとめていく過程は、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を磨く機会となる。

実験の考察では、都築先生が机間指導を行いながら生徒たちの話に耳を傾け、適宜、必要な知識を補足した。「単振動はそうした動きをするのかな?」「ひもの長さは関係ないかな?」など、少しヒントを与えるだけで、止まっていた議論が進み始めることも多かったと言った。

「大切なのは、生徒にどのくらいの力があるのを見極めることです。生徒の力に応じて助言の内容や頻度、声かけのタイミングなどを変えて、生徒が自ら気づき、思考を深められるようにしています」

今回、ほぼすべての班が1回目の実験で仮説通りの値を得られなかった。理論的に正しくても、材料の重さや摩擦、タイミングなど、条件や環境のわずかな違いで結果は大きく変わる。

「今回の授業のねらいは、生徒に失敗を経験させることでした。教科書に書かれていることがいかに理想的な条件・環境で成り立っているのかを実感し、ものづくりはそう簡単に教科書通りにはいかないことに気づいてほしかったのです。ですから、事前に実験計画書を確認した際には、明らかに失敗が予想される班以外は、あえて指摘をしませんでした。世に出る製品の多くは、失敗の繰り返しの中から生まれます。失敗した理由を深く考え、成功につながるヒントをつかんでほしいと思っています」

#### 場づくりへの配慮

### ルーブリックで評価規準を 事前に示し、チャレンジ精神を喚起

生徒には、評価のポイントは「なぜ失敗したのかを話し合い、どのように改善したのか」であると、事前に説明した。

「私が作成した活動段階ごとのルーブリックを示し、評価のポイントは、分析的な確さや班活動での協働性など、授業に取り組む過程だと説明しました。実験の成否は評価に関係ないと明言し、生徒が自由な発想で実験にチャレンジできる雰囲気にとしました」

実際、生徒は、思い切った実験方法を考え出したり、大胆な改善をしたりしていたという。

そして、評価は、実験計画、実験、発表準備・発表の各活動において、教師の評価と生徒の自

## 授業デザインシート

【教科・科目】理科・物理 【分野・単元】学習した全分野

【テーマ・作品】重力加速度の値の測定

【設定時数】全8時間

【単元の目標】①既習事項を活用し、グループで話し合いながら実験全体の計画を立てて実践することができる。②活動全体の内容をまとめ、発表することによって、互いに理解を深め、興味や関心を高める。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
① 実験計画書の作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまで学習した知識を用いて意欲的に探究する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1班7～8人の班をつくる。</li> <li>「重力加速度の値の測定」をテーマに、実験方法や必要な器具について話し合い、実験計画書を作成。</li> <li>自己評価シートに記入して、振り返りを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまで学習してきた知識を用いて計画を立てるように指示をする。</li> <li>計画書が完成したら生徒に説明させ、助言、指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習の知識を用いて的確に計画を立てられているか。</li> <li>班で協力して活動できているか。</li> </ul>
② 重力加速度の測定実験	<ul style="list-style-type: none"> <li>正しい知識を理解し、身につける力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験計画書に従って、実験を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験を行わせ、助言、指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>危険を伴う実験ではないか。</li> <li>班で協力して活動できているか。</li> </ul>
③ 実験の考察・討議	<ul style="list-style-type: none"> <li>仲間と協力して問題を解決する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>協働性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験結果をまとめる。仮説通りの結果が得られなければ、その理由と仮説に近づくための改善策を班で話し合い、実験計画を立て直す。</li> <li>考察・討議の結果をレポートにまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループで解決できない時に助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見をしっかりと出し合っているか。討議に参加できていない生徒はいないか。</li> </ul>
④ 再実験	<ul style="list-style-type: none"> <li>正しい知識を理解し、身につける力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>改善点に注意しながら、再び実験を行う。</li> <li>自己評価シートに記入して、振り返りを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>実験を行わせ、助言、指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>危険を伴う実験ではないか。</li> <li>班で協力して活動できているか。</li> </ul>
⑤ 実験結果のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>積極的に意見を出し合いまとめる力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2回の実験結果と班で討議した内容をレポートにまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>結果を報告させ、助言、指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見をしっかりと出し合っているか。討議に参加できていない生徒はいないか。</li> </ul>
⑥ 発表準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①～⑤の活動をクラス内で報告するためのポスターを作成。完成したら担当教師の点検を受ける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>完成したポスターを提出させて、助言・指導を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>班で役割を分担して活動できているか。</li> </ul>
⑦ 発表会	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いに評価し合いながら、新たな発見や課題を見つけて探究する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>判断力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各班の発表を聞き、理解できた点、よかった点、改善すべき点などをレポートにまとめる。</li> <li>各班の発表後に質疑応答を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各班が発表を終えた後、助言、講評を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表の内容や仕方を観察する。</li> </ul>
⑧ 発表会・振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>互いに評価し合いながら、新たな発見や課題を見つけて探究する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>判断力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表が最も分かりやすかった班とその理由、活動全体を通して学んだことをレポートにまとめる。</li> <li>自己評価シートに記入して、振り返りを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回の活動を通して最も学んでほしい、「ものは1人ではつくれない。多くの人の協力によってつくられていく」「失敗の中から成功につながるヒントが見つかる」ことを伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表の内容や仕方を観察する。</li> <li>学んだことについて記述するように指示をする。</li> </ul>

\*都築先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

### 成果と課題

## ものづくりの醍醐味や協働の大切さを実感する生徒たち

取り組みの成果は、授業後の生徒の感想に表れている。「周りとは協力し合うことやコミュニケーションの大切さが分かった」「大学での研究にも生かしていきたい」など、高校卒業後にもつながる多くのことを学んだ様子が見えたり。また、都築先生自身の授業形態にも変化が出てきたという。研究授業を始めた頃から、通常の授業でも、生徒同士で協力して演習問題を解かせたり、実験結果の違いについて考えさせたりするようになったのだ。

課題は、今回のような授業をより多く行うことだ。現状では年1回だが、授業計画を見直して、年2～3回実施することも検討中である。

「他校の先生に取り組みを紹介すると、『3年生のこの時期に行うのはすごいですね』と言われることがあります。しかし今後、大学入試で多面的・総合的な評価が重視されるようになれば、ただ問題を解いて答えを導き出すような学力だけでは、通用しなくなるでしょう。失敗させる経験は、遠回りに見えても、生徒の将来に必ず生きるものだと考え、取り組みを深化させていきたいと思っています」

●3年生「英語超人Ⅲ」（学校設定科目）の授業で、題材はアメリカ・スタンフォード大学で出された課題を紹介したエッセー。次時以降に行う本文読解に向け、ペアワークを通して課題について自分のアイデアをまとめた。（P.29に授業デザインを掲載）

教科書の内容と関連した money、homework などの単語を英語で説明し、何の英単語かをあてるクイズをペアで行う。教科書の内容は、元手の5ドルで2時間以内にどれだけ稼げるかという課題に関するエッセー。本時の最後にはその課題について自分の考えをまとめるため、クイズは自分の言葉で説明するというウォーミングアップを兼ねている。

# 英語を使う必要感・有用感を重視した課題設定で生徒の主体性を引き出す

## 森先生のアクティブ・ラーニング

「実践的な英語力を育みたい」  
その思いが授業改善の第一歩に

森一真先生は、以前から実践してきたアクティブ・ラーニングに、2015年度から本格的に取り組み始めた。

「伝えたい思いがあるから英語を学び、その延長線上に定期考査や大学入試がある……。そうした流れを目指して授業づくりをしていました」



### 大阪府立和泉高校

森 一真 もり・かずま

教職歴6年。同校に赴任して5年目。  
3学年担任。生活指導部。英語科担当。  
アクティブ・ラーニングの実践は5年目になる。

### 大阪府立和泉高校

◎郡立泉南高等女学校として開校。教育目標は「いかなる国際情勢でも生き抜く人材育成」。2013年度にグローバル科を設置し、14年度以降、大阪府教育委員会「骨太の英語力養成事業」の指定校。

◎設立 1901(明治34)年

◎形態 全日制/普通科・グローバル科/共学

◎生徒数 1学年約400人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、大阪大、大阪教育大、神戸大、和歌山大、大阪市立大、大阪府立大、奈良県立大などに67人が合格。私立大は、京都産業大、同志社大、同志社女子大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ823人が合格。

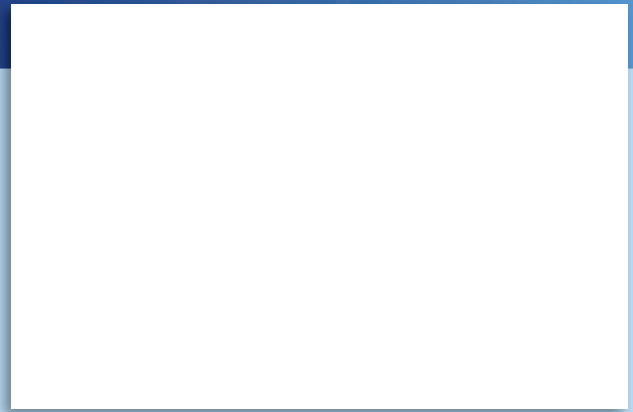
◎URL

<http://www.osaka-c.ed.jp/izumi/>



本文の要点をモニターに映し、空所を埋めながら内容を確認。続いて先生が「スタンフォード大学の学生と勝負しない?」と、授業後半に教科書本文にある課題に取り組むことを予告。

**生徒の声** アウトプット中心なので英語力の伸びを実感できる上、文法についてもプリントできちんと学べるので安心です。



教科書本文への期待感を高めることをねらいとして、生徒が今までに経験した面白い宿題や課題について英語で発表させる。続いて、教科書本文の第1段落のみを印刷したプリントを配布。約1分間黙読した後、ペアでその内容を確認し合う。ここでは確実な理解を重視して、日本語で話し合わせた。

が、なかなか思うようにはできませんでした」

当時は、生徒にとつてペアワークの必然性が感じられない場面があった結果、生徒の学びが深まっていなかったり、筆記試験で高得点を挙げる生徒であっても実践的な英語を身につけていかなかったりしていた。また、大学入試に向けて、講義中心の指導をしていた時もあったと言う。

「これが自分の目指していた授業なのか」と悩みながらも試行錯誤を重ね、少しずつ今のスタイルを獲得していった。そして、15年度の1学年から、コミュニケーション重視の現在の授業スタイルを続けている。

「生徒に実践的な英語力を身につけてほしいといった思いから、いかに生徒を、英語を使いたいという気持ちにさせるか、いかにそうした場面を多く設けられるかを追究していったところ、自然と現在の授業スタイルになっていきました」

### 実践的な英語力のアップと、大学入試に対応した指導の両立を目指す

今回の授業は、グローバル科3学年の理系クラスでの学校設定科目「英語超人Ⅲ」で、「Lesson7」の全7時間中の1時間目となる。この科目は、英語の4技能を高めることを目的として、グローバル科の1〜3学年で設定されている。

教科書の内容は、元手の5ドルで2時間以内にとだけ稼げるかを考え、実行するという、アメリカ・スタンフォード大学で実際に出され

た課題についてのエッセーだ。今回の授業では、課題のルールが記された第1段落を読み、黙読やペアワークを通じて文法や慣用句、機能語などについて学ぶ。その後、ディスカッションを通じてその課題について考える。

3年次2学期の授業であるため、森先生は大学入試を意識した指導も行う。今回は、本文のプリントの空所について、「なぜ、σが入り、τが適切ではないのか」をペアで話し合わせた。

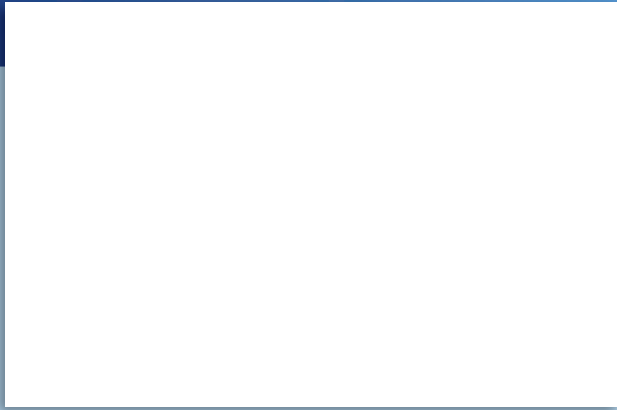
「日常会話であれば気にしないようなことでも、生徒の希望進路の実現に向け、大学入試で求められる文法の正確さの指導は必要です。実践的な英語力と入試に対応できる力の双方を伸ばす授業を目指しています」

#### 思考の活性化・深化への配慮

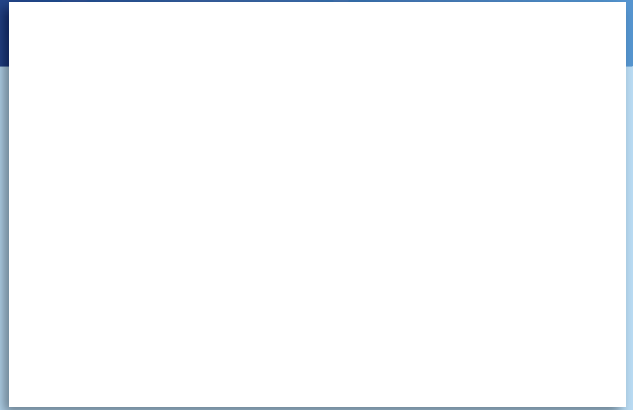
### 本当に話したいと思えるテーマだからこそ、主体的になる

森先生は、まずは生徒に自分の考えを持つようにつ指導することを重視している。例えば、ペアやグループでのワーク前には1人で考える時間を設け、難しいテーマであれば、逆にペアやグループで他者の意見を聞いてから、自分の考えを整理する時間を設けている。自分の意見と、教科書本文や他者の意見を比較・検討させることで、より深い思考を促すためだ。

また、1人で考える時間は短くし、5分間の課題なら3分間程度でストップをかける。時間



本文にあるスタンフォード大学の課題について考える。まずは1人で2分間考えた後、ペアで10分間話し合って互いのアイデアを共有しながら、各自、3分間程度のスピーチにまとめる。その後、先生の指名を受けた生徒が英語で発表。「得意なマジックで大道芸を披露する」などのアイデアが出た。最後に次時の内容を伝えて授業は終わった。



本文が書いてあるプリントを使い、ペアで音読する。テンポよく進むよう1文ごとに交代する。プリントの本文には空所があり、それを自分で埋めながら読み進める。その後、on や for などの機能語が、なぜその空所に入るのかなどをペアで理由を述べ合い、語彙や慣用句への理解を深める。先生は机間巡視で取り組み状況を観察し、質問があれば全体説明を行う。



本文のプリントは Level 0～2 の3段階。Level 0 は第1段落の全文が掲載しており、Level 1・2 は重要な単語や慣用句の空所が増える。段階的に理解を深められる構成としている。

を長く取り過ぎると、間延びする可能性があるからだ。「森先生は短めに切り上げるから早く考えないといけない」といった感覚を持たせ、生徒の脳に負荷をかけるのである。

森先生がもう1つ重視しているのは、課題設定の工夫だ。

「誰かと話したいと思う課題でなければ、積極的に英語を使おうという気持ちにはなりません。生徒が興味・関心を持つトピックになっているか、もっと学びたいと思える内容になっているかは、常に意識しています」

今回の授業では、生徒自身の宿題や課題の経験を思い出させた上で、「実は、スタンフォード大学ではこんなに面白い課題があつて……」という形で教科書のリーディングに入った。また、

#### 場づくりへの配慮

### 必ず挨拶をし、敬意を払うことで場を和ませ、信頼感を高める

グローバル科は1学年2クラスのため、毎年クラス替えがあつても生徒同士の親密度は高い。3週間ごとに席替えをして、ペアワークの相手が替わるようにしているが、相手が誰であつても自然に活動に取り組み。

そうした中でも、森先生が大切にしているのが挨拶だ。生徒同士が向き合い、活動前は「よろしく願います」、終了時は「ありがとうございますございました」と声をかけ合う。一緒に活動に取

授業の半ばには「スタンフォード大学の学生と勝負しよう」と呼びかけ、後半の活動に対する意識づけを図った。最後にアウトプット活動があることで、適度な緊張感が生まれ、生徒は集中して黙読やペアワークに取り組み。

今回は、課題のルールが書かれた第1段落だけを読み、スタンフォード大学の学生からどのようなアイデアが出たのかは2時間目以降に持ち越した。アメリカの一流大学の学生のアイデアが自分たちのアイデアと比べてどうなのかと、期待を持たせて授業を終わらせることで、「先を知りたい」「読みたいから授業を受ける」という意識を引き出していく。そうした授業設計としているため、森先生の授業では原則予習は必要なく、授業で教科書を初見で読ませている。

## 授業デザインシート

【教科・科目】英語・英語超人Ⅲ(学校設定科目)

【設定時数】7時間中の1時間目

【分野・単元】Lesson7

【本時全体の目標】本文を読む前に自分の意見を構築することで、本文の読みにつなげる。

【テーマ・作品】「A Class from Stanford University」

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
Warming up (Guessing Game)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の言葉で説明する力</li> <li>簡単な言葉に言い換えたり、具体化したりする力</li> <li>Keywordの提示で本文の内容を予想する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現力</li> <li>主体性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>提示された単語を英語でほかの言葉に言い換え、ペアの相手に伝える。</li> <li>生徒の表現を確認し、適切でない表現があれば、指摘したり、クラス全体で考えたりする。</li> <li>新出単語の一部を導入する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の答えよりもワンランク上の答え方を提示する。</li> <li>全体で共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の調子を見極め、生徒が単語で発話している場合、文にして返す。</li> </ul>
Questions Oral Interaction	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の過去を振り返り、表現する力</li> <li>自分の過去の気持ちを英語で表現する力</li> <li>人の思いを理解する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> <li>表現力</li> <li>主体性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文と関連し、かつ生徒にとって身近な内容の発問をすることで、自己表現を促す。</li> <li>生徒が答えやすいよう、まず教師が自分の経験を話す。</li> <li>興味深い内容について共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Warming upで提示した単語と関連させる。</li> <li>教師が具体例を示しながら、生徒に考えるきっかけと時間を設ける。</li> <li>ペア・全体で共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が英語で表現できない部分は、日本語で話してもよしとする。ただし、教師やペアがその日本語を英語で言い換える。</li> </ul>
Reading	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要な情報を読み取る力</li> <li>情報を整理する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能</li> <li>主体性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の発問の答えを予想させてから本文を読み、必要な情報を探させる(今回は内容が分かりやすいため、ノートにメモはさせない)。</li> <li>ペアになって、日本語で概要を伝え合い、確認する。</li> <li>確認した内容が合っていたか、教師の作成したスライドで、全員で確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発問の答えを予想してから本文を読ませることで、情報をどのように整理するのか見通しを持たせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>読む時間を少し短めに設定し、集中力を高めさせる。</li> </ul>
Read aloud	<ul style="list-style-type: none"> <li>音読しながら語彙・文法・文構造・内容の理解を深める力</li> <li>英語を英語で理解する力</li> <li>疑問点を調べたり、他者に相談できたりする力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体性</li> <li>協働性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>概要を把握した本文について、音読を重ねて、語彙・文法・内容の理解を深めていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>できる限り指示を少なくする。</li> <li>できる限り机間巡視をして個別に指導を行う。</li> <li>その際に多くの生徒がつまづいたポイントは全体で共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>英語の得意な生徒が自分の音読が終わって、指示待ちにならないように音読活動の見通しを持たせる。</li> </ul>
Discussion	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見を自分の言葉で表現する力</li> <li>本文の続きの内容を予想する力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> <li>表現力</li> <li>主体性</li> <li>多様性</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発問に対するアイデアをペアで話し合う。</li> <li>メモをさせ、様々なアイデアと比較しやすくさせる。</li> <li>最もよいアイデアを選び、ペアで共有する。</li> <li>よいアイデアを全体で共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>次時以降で扱う本文にはスタンフォード大学の学生が実際に出したアイデアが書かれている。それよりもよいアイデアを出せるか、競争心を持たせられるよう、生徒に語りかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語で考えると思考が複雑になるので、生徒が表現しにくい可能性がある。授業の始めのWarming upと同じで簡単に言い換えることを意識させる。</li> </ul>

\*森先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

### 成果と課題

## ネイティブ・スピーカー相手に堂々と英語を使う生徒たち

り組む仲間、頑張り合った仲間に対して、敬意やねぎらいを示すことで、場が和み、信頼感が高まるという。

そのような授業改善の最大の成果は、大半の生徒が積極的に英語で自分を表現できるようになったことだ。例えば、自分の思い出の品を紹介するという、ALTと1対1のスピーキングテストで、生徒は堂々と自分の思いを語っていたという。

「以前は、筆記試験の出来はよくても、ALTとうまく話せないという生徒が少なくありませんでした。今もすべての生徒が日常会話を流暢に話せるとまではいきませんが、一生懸命伝えようとしている生徒の姿勢を誇らしく思います」

課題は、教科全体で実践的な英語力を向上させる指導の質をさらに高めることである。

「3学年で教科書を統一したことで、学年を超えて指導法や教材について共有する時間が増えました。今後も、教師同士で語り合う場をさらに設けたいと考えています。本校には、ほかにも素晴らしい実践を行っている先生方がいます。教科や学年を超えて指導ノウハウを共有し、英語科全体でも互いを刺激し合い、指導力のさらなる向上を図っていきたいと思います」

宮城県・私立東北学院中学校・高校

魅力的な学校づくり

# 特色あるコース制の導入と PDCAサイクルの確立で、 生徒の希望進路を実現

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 他校の台頭などにより、中学校の入学希望者が減少し、生徒の学力にも課題が見られるようになった
- 同校の中学校からほかの高校への進学者が増えた

### 実践内容

- **高校のコースの改編** 生徒の希望進路や高校生活の志向に応じた「特別選抜コース(中高一貫)」「特別進学コース」「総合進学コース」「東北学院大学コース」の4コース編成とした
- **探究的な学びの場「3L希望学」の設置** 1人1台のノートパソコンを配備し、「持続可能な開発のための教育」(ESD)を軸にした中高一貫の探究活動「3L希望学」を始動
- **PDCAサイクルによる効果検証** 「人間形成部門」と「学力形成部門」の2本柱で、数値目標や学校目標の達成度を検証するPDCAサイクルを整備

### 成果と展望

- 新設の特別選抜・特別進学の両コースで成績上位層が増加。主体的な学習態度も涵養されつつある
- 教師間に学校全体で改革に取り組む意識が定着

宮城県仙台市に位置する私立東北学院中学校・高校は、キリスト教精神に基づく全人教育を推進している。その一環として、ユネスコスクールへの加盟を視野に入れ、「持続可能な開発のための教育」(ESD)に力を入れている。市内の私立中高一貫校として人気を誇っていた同校だが、ほかの私立高校の躍進や公立中高一貫校の台頭などにより、2000年代に入ってから入学希望者が減少するとともに、学力に課題のある入学者が増え、大学進学実績も伸び悩むようになった。そうした状況に危機感を抱く教師たちが中心となって対策を立てたこ

## 高校教育の質の向上を目指し、 指導の体制と内容を見直す

## PROFILE



仙台神学校として開校。「LIFE (いのち) LIGHT (光) LOVE (愛)」を学校標語とし、福音主義キリスト教の信仰に基づいて「個人の尊厳の重視と人格の完成」を目指す。「持続可能な開発のための教育」(ESD)を推進中。

設立 1886 (明治19) 年

形態 全日制/普通科/男子校

生徒数 1学年約360人

2017年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、宮城教育大、筑波大、千葉大、東京外国語大、九州大、宮城大などに79人が合格。私立大は、岩手医科大、東北学院大、上智大、中央大、早稲田大、同志社大、川崎医科大などに延べ431人が合格。

住所 〒983-8565  
宮城県仙台市宮城野区小鶴字高野123-1

電話 022-786-1231

Web site <http://www.jhs.tohoku-gakuin.ac.jp/>

ともあったが、抜本的な解決が難しいまま、15年度中学校入試では開校以来、初の定員割れに至った。

そこで、全校体制での改革を図ろうと、大橋那一校長は、15年3月に全教師が出席する緊急懇談会を開いた。募集広報や入試制度といった様々な観点から現状が分析される中、重要課題として位置づけられたのが、高校教育の質の向上だったという。岩上敦郎副校長は次のように述べる。

「本校の中学校からほかの高校に進学する生徒が増えている実態があり、それは、学校全体の大きな課題だと受け止めました。中高



宮城県・私立東北学院中学校・高校校長  
**大橋那一** おおし・くにかず  
教職歴24年。同校に赴任して5年目。「2生学問、一生求道」



宮城県・私立東北学院中学校・高校副校長  
**岩上敦郎** いわかみ・あつお  
教職歴28年。同校に赴任して29年目。「敬神愛人を実践する生徒の育成を目指す」



宮城県・私立東北学院中学校・高校  
教職歴29年。同校に赴任して30年目。進路指導部長。「CARPE DIEM（その日を摘め）」



宮城県・私立東北学院中学校・高校  
教職歴26年。同校に赴任して27年目。教育研究部長。「生徒が言葉と仲間の力を信じる」とができるようにかかわっていくこと」

接続をきちんと機能させるためにも、高校での指導の体制と内容を見直し、生徒の希望進路に応えられる学校に生まれ変わらなければならぬと考えました」

## 生徒の進路意識に応じて 高校のコースの特色を図る

学校改革の柱と位置づけられたのが、17年度に行った高校のコースの改編だ。以前は2年次から文理別にコースを分けていたが、生徒の希望進路や高校生活への志向にきめ細かく応じられるよう、高校入学段階から4コース編成とした。難関国公立大学や医学系大学への合格を目指す「特別選抜コース（中高一貫）」と「特別進学コース」では、授業時数を増やし、放課後補習も必須とする。地域社会に貢献できる人材の育成に重点を置き、難関大学への合格を目指す「総合進学コース」と、東北学院大学への内部進学希望者を対象とする「東北学院大学コース」では、文武両道の実現を図り、多様な進路に対応できるカリキュラムを策定している。コースの改編を主導した進路指導部長の小松光信先生は、こう述べる。

「本校がどのような生徒を育てたいのかが分かるよう、コースごとに特色を打ち出しました。また、学力によって振り分けるのではなく、生徒が自分の希望や志向に合ったコースを選択できるようにしました。自己実現につながると感じることで、生徒の主体性は高

まると考えています」

コース制の導入とそれに伴うカリキュラム改編について、現在の教師数で対応できるのか、施設・設備は十分なのかといった観点からも議論された。実際、選択科目の増加などにより、教師の増員や教室の確保などが必要だったため、大橋校長は学校法人東北学院の理事会で予算の引き上げを求めたと話す。

「理事会の構成員の大半は東北学院大学の教員なので、高校の改革の目的と必要性を理解してもらえよう、かかる費用を具体的に示しながら、何度も粘り強く交渉しました。そうして最後には賛同が得られ、予算を確保することができました」

## ICTの活用で 探究活動の充実を図る

「総合的な学習の時間（以下、「総合学習」）の改善にも力を入れている。高校では、以前から、同校の学校標語「3L」（LIFE・LIGHT・LOVE）とESDをテーマとする進路学習を「総合学習」の中心に据えていたが、16年度からは中高一貫の「3L希望学」へと改編。環境・貧困・平和といった多様な視点から、持続可能な社会を創造するための方法を探究することにした。中学校では、身近な環境問題や国内外の職業事情について学んだ上で、シンガポール研修と関連づけた異文化理解教育に取り組む。また、卒業研究として、生徒個々の関心

に応じたテーマで研究・発表を行う。高校1年次には、世界に目を向けて、格差や貧困といった課題について理解を深め、2年次には、戦争などの日本の歴史について調べてから、平和の実現に向けて何ができるかを考える。そして3年次には、生徒自身の将来のビジョンを実現するために必要な手段を研究し、現実の進路に近づけていく。

改編にあたっては、ESDについて改めて全教師の理解を深めるため、専門家を招いて講演会を開いた。そして、生徒がESDの視点を進路選択に結びつけられるよう、教師間でカリキュラムの検討を進めていった。教育研究部長の柴田隆一先生は、次のように語る。

「中学校では身近なフィールドから学び始め、生徒が自分で課題を設定して探究活動を行い、高校・大学進学後にもさらに研究を深めていけるような流れを想定しました。漫然と進路を選ぶのではなく、なぜそこに行くのか、何を学びたいのかを明確にして進路を選択してほしいと考えています」

本格的な探究活動が可能となった背景には、ICT環境の整備がある。16年9月に生徒1人1台のノートパソコンを配備したことにより、資料集めや情報共有が容易になり、「総合学習」の改善が促進されたという。

「スライド作成などのスキルが高く、ICTを用いた発表が上手な生徒もいます。分からないことがあれば、面識のない生徒同士で

も抵抗なく質問したり、情報を共有したりします。ICTの導入によって生徒同士の交流が濃密になっただけでなく、教師は想像以上に生徒の表現力やコミュニケーション能力が高いことにも気づかれました」(柴田先生)

活動の成果物は、「Class」(※1)に記録し、いつでも確認できるようにしている。現在は、20年度の大学入試改革でも重視される多面的・総合的の評価を見据え、生徒個々の情報を蓄積している段階だが、将来的には生徒が自分の活動を振り返り、次の探究活動の視座をどこに置くのかを考えたり、進路選択の材料にしたりする活用法を想定している。

## 指導力の継続的な改善に向け、PDCAサイクルを確立

教育の質を高めるためには、指導の課題を継続的に洗い出し、それに応じて改善していく必要がある。そこで、同校では、「人間形成部門」学力形成部門」の2つの組織を中心に、PDCAサイクルの構築に取り組んでいる。

人間形成部門では、同校の中期計画である「21世紀にチャレンジする学院ボーイズ」Global Citizenをめざして」の実現に向けて、コミュニケーション能力やリーダーシップ、発信力、グローバル人材に必要な資質・能力の伸びなどを検証する。評価システムの整備は発展途上だが、学校独自のルーブリックと、ベネッセの「GPS-Academic(※2)」(以下、「GPS」)

などの外部指標を組み合わせることで行っている。独自のルーブリックは、生徒が自分の成長を可視化するとともに、教師が取り組みの成果を検証するツールとして活用している。一方、GPSは、高校2年生の12月に実施する。

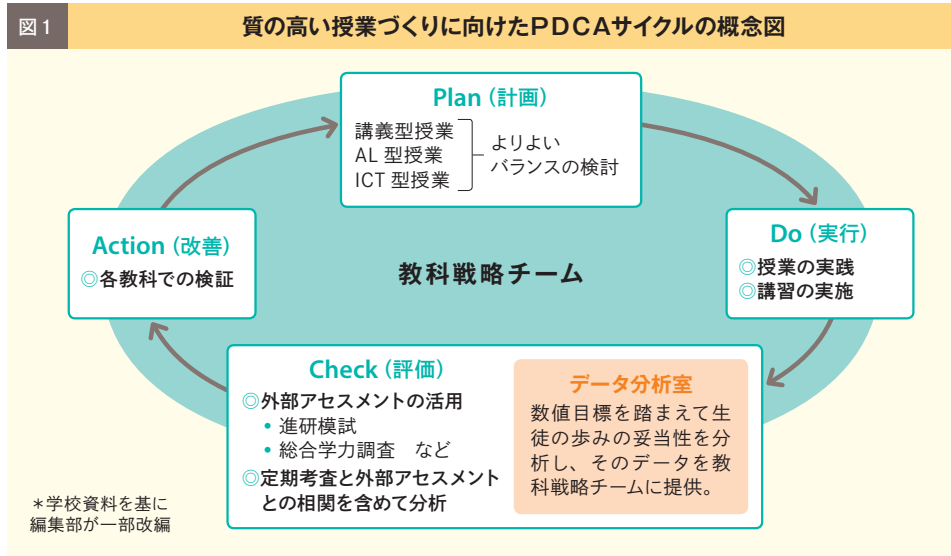
「GPSの受検を通して、中学1年生からの探究活動の成果を客観的に測るだけでなく、どのような力が社会で求められるのかを体験的に学ばせていきたいと考えています」(柴田先生)

学力形成部門では、進路指導部や教務部、教育研究部などの教師、教科ごとに設けられた教科戦略チームの教師が所属し、教科学力の検証を担う。教科戦略チームは、各教科4人から成り、模試の結果から分野・単元ごとに課題を洗い出し、具体的な指導改善の方法をまとめる。その内容は、学力形成部門でさらに検討・改善され、学校全体に共有される。新たな予算措置が必要な場合や、学校全体にかかわる事柄については、副校長、教頭、各部長から成る「総合改革室」でも検討する。

以前は、学年団に所属する進路指導部の教師が模試などのデータを取りまとめていたが、組織的にPDCAサイクルの確立を図るため、進路指導部内にデータの整理・分析を専門とする組織「データ分析室」を設置し、ここでの分析結果を教科戦略チームに提供することにした。

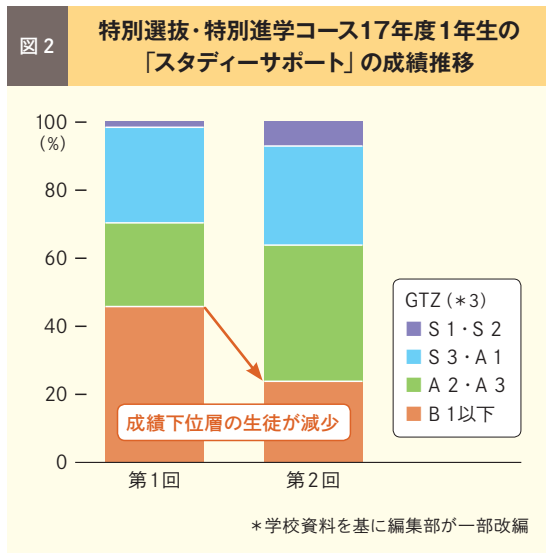
「学年団という枠を超え、学校全体を俯瞰できる環境を整えたい」という思いがありまし

\*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。  
\*2 ベネッセの教材の1つ。問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。



た。そうすれば、思い入れやイメージにとらわれず、公平に現状を分析しやすくなり、実効性の高い指導改善につながると考えました」（小松先生）

例えば、質の高い授業づくりを目指し、コースごとにベネッセの「進研模試」を始めとするアセスメントの目標値を定め、それが達成でき



17年度に始まったコース制は早くも成果を上げつつある。特別選抜・特別進学の両コースでは学力向上が著しく、ベネッセの「スタディーサポート」の結果では、成績上位層が厚くなり、

### コースの魅力を高めていききたい

「コースの魅力をさらに打ち出し、学校の魅力を高めていききたい」（小松先生）

17年度に始まったコース制は早くも成果を上げつつある。特別選抜・特別進学の両コースでは学力向上が著しく、ベネッセの「スタディーサポート」の結果では、成績上位層が厚くなり、

ているかどうかを組織的に分析し、学校全体の教科指導力の向上を図っている（図1）。

「教科指導はどうしても個々の教師の力量や努力に負うところが大きくなり、目標の達成をすべて個人の責任に委ねると、批判が個人に向けられ、学校がバラバラになりかねません。教科全体が組織として責任を持つことができる体制を整備したいと考えました」（小松先生）

下位層の生徒が減少している（図2）。

「生徒が、学習中心に取り組むコースであるという覚悟を持って自らコースを選択し、だからこそしっかり学びに向き合えた結果だと思えます。成果が出たことで、生徒の顔つきも明るくなりました。教師に指示されて取り組む『勉強』から、自分たちで取り組む『学習』に転換しつつあると感じています」（小松先生）

全校を挙げて改革にあたる重要性が教師間に浸透したことも、大きな成果と言えるだろう。若手を中心に、率先してアイデアを出す教師が増え、分掌間の交流や情報共有も進んでいる。

「学校改革には管理職のマネジメント力が大切だと言われていますが、学校を変えていく原動力は、何といたっても現場で陣頭指揮にあたるミドルリーダーの力です。小松先生や柴田先生のような、豊かなアイデアを持っている先生方に先頭に立つてもらったことで、改革が一気に動き始めました」（岩上副校長）

今後は、文武両道をうたう総合進学コースと東北学院大学コースの特色化に力を入れ、取り組みを充実させていく。

「地域や大学でリーダーシップを発揮できる力を育成していく必要性を感じています。学校設定科目や東北学院大学との高大連携などを効果的に活用しながらコースの特色を明確にし、学校の魅力をさらに高めていきたくと考えています」（大橋校長）

\* 3 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階がある。

# 「オール桑北」で学力向上と キャリア教育改革を進め、 地域に信頼される学校へ

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 自己肯定感が低く、学習や進路に対しても後ろ向きな生徒が多かった
- 教師の異動などによって、様々な取り組みが形骸化

### 実践内容

- **アセスメントの活用の充実** ベネッセ「基礎力診断テスト」(\*1)を年1回から3回に増やし、学力推移を把握。朝学習の時間での事前指導や、成績下位層の生徒を対象とした事後指導を徹底。また、先輩の成功例を紹介したり、成績上位層の生徒などを表彰したりして、学習意欲や自己肯定感の向上を図る
- **キャリア教育の再構築** 育てたい生徒像から具体的な取り組み、実施方法までを、教師全員が参加してワークショップ形式で検討し、3年間のキャリア教育計画を策定

### 成果と展望

- 「GTZ」(\*2)がD3の生徒が大幅に減り、就職試験の1次試験合格率も過去最高を記録
- 生徒が進路について前向きに考えるようになり、地元企業からの評価も回復

## PROFILE



大学進学希望者中心のカレッジクラス、就職を目指すチャレンジクラスの2類型。「総合的な学習の時間『みらい』」、インターシップ、コミュニケーション力向上のための保育交流など、特徴的な取り組みを展開。

設立 1980(昭和55)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年240人

**2017年度入試合格実績(現浪計)** 国立大は、三重大に1人が合格。私立大は、愛知学院大、愛知工業大、金城学院大、鈴鹿医療科学大、中部大、東海学園大、名古屋学院大、名古屋芸術大、名古屋文理大、四日市大などに延べ41人が合格。

住所 〒511-0808 三重県桑名市大字下深谷部字山王 2527

電話 0594-29-3610

Web site <http://www.mie-c.ed.jp/hnkuwa/>

## 若手教師の熱意が 改革の原動力に

三重県立桑名北高校が、学力向上とキャリア教育の改革に着手したのは、2016年度のことだ。それまでは様々な課題があり、生徒指導に力を入れていたものの大きな改善は見られず、地域の評価も芳しいものではなかった。そのような中、教師は前向きに教育活動に取り組んでいたが、方法については手探りの状態だった。学習や進路選択に前向きに取り組まない生徒も多く、大学入試や就職試験で苦戦を強いられることが常態化していた。2学年主任の森西基雄先生は、当時の様子を次のように語る。

「担任として15年度に卒業生を送り出しま

\*1 GTZ(学習到達ゾーン)という指標で生徒一人ひとりの基礎学力の定着度と学習力、コミュニケーション特性(自我同一性)を測る、ベネッセの生活・学習指導用テスト。  
\*2 学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の学力評価指標。「S1」～「D3」の15段階があり、基礎力診断テストでは「A2」～「D3」で評価される。

したが、生徒の力を引き出すというよりも、無事に卒業させることが最優先になっていたという反省がありました。16年度に1学年主任となった時、生徒の力を引き出し、伸ばす指導をしたいと考え、保護者にもその決意を伝えましたが、具体的な改革のイメージは描



**三重県立桑名北高校校長**  
**岡田真次** おかだ・しんじ

教職歴33年。同校に赴任して1年目。「生徒の力を引き出し、『自律』への支援を行う」



**三重県立桑名北高校**  
**井上和也** いのうえ・かずや

教職歴24年。同校に赴任して2年目。主幹教諭。進路指導部代表。「生徒の可能性を信じ、常に新鮮な気持ちで向き合う」



**三重県立桑名北高校**  
**西脇あずさ** にしわき・あずさ

教職歴12年。同校に赴任して6年目。進路指導部総合学習担当。「生徒とのかわりを第一に、よりよい指導を考えていきたい」



**三重県立桑名北高校**  
**森西基雄** もりにし・もとこ

教職歴9年。同校に赴任して5年目。2学年主任。「何事にも愛と情熱と魂を持って、生徒にぶつかっていく」



**三重県立桑名北高校**  
**中村誠一** なかむら・せいいち

教職歴8年。同校に赴任して3年目。1学年主任。「生徒を受け止め、時には叱咤激励し、生徒の心に響く教育を目指す」



**三重県立桑名北高校**  
**小林亮司** こばやし・りょうじ

教職歴8年。同校に赴任して4年目。生徒指導主事。「愛と情熱と魂。教師は『気づかせ屋』」

けていませんでした」

そうした折、16年度に同校に赴任してきた主幹教諭の井上和也先生が、5月に行われた校内研修で、前任校での改革事例を紹介した。ベネッセの「基礎力診断テスト」(\*1)を軸に、学力向上のみならず、学校全体の教育の質を高めていったという報告は、多くの若手教師の心に火をつけた。生徒指導主事の小林亮司先生もその1人だった。

「改革」と言うと、特別な取り組みを新たに始めて、生徒の気持ちを向上させるというイメージでしたが、井上先生の前任校での改革は、生徒の毎日の学習をしつかり支えるという取り組みでした。学校生活の根幹は授業であり、生徒の目を学校に向かせるためには、まず授業をきちんと理解させることが最も大切だと言われ、私たちが力を入れるべきことは何か、改めて気づかされました」

そうして、井上先生の話に共感した教師たちを中心に、学力向上とキャリア教育の改革が始まった。

## 朝学習の時間を有効活用し、事前指導を徹底

まず着手したのは、基礎力診断テストの徹底活用だ。同校では毎年4月に同テストを受験していたが、事前・事後指導や結果分析が十分ではなかった。そこで、事前・事後指導を徹底し、行う体制を整えるとともに、短期サイクルで

生徒の学力推移を把握し、指導改善にも生かせるよう、9月と1月にも受験することにした。

事前指導は、10分間の朝学習の時間に行うこととした。普段は漢字練習などに充てているが、基礎力診断テスト実施の10日前から「One-Weekトライアル」(\*3)に取り組ませ、担任と副担任がチーム・ティーチングで指導する。

さらに、生徒の意識を変えるため、今の時期から頑張つて成績を上げ、就職を決めた先輩の話や、基礎力診断テストのGTZ(\*2)がD3だった生徒の多くが就職試験で不採用となったことなどを、企業名を挙げながら説明した。

「今の頑張りが自分の将来に直結していることを、生徒はあまり意識していません。そこで、遅刻や欠席をせず真面目に学習を頑張れば、テストでもよい成績が取れて、自分に自信を持てるようになり、結果的に進路選択にも有利に働いて、未来が開けるということを、全校集会やホームルームなどで繰り返し伝えました」(井上先生)

## 成績下位層の生徒を対象とした個別指導で生徒の弱点を知る

事後指導では、GTZがD3の生徒を対象とした「D3学習会」を始めた。これは、基礎力診断テストで国数英3教科すべてD3だった生徒を対象に行う補習で、校長以外の全教師がそれぞれ2〜3人の生徒を受け持ち、学習チューターとして個別に指導する。期間は約2週間、

\*3 「基礎力診断テスト」に付属している事前、または事後に取り組む学習教材。

日時は学習チューターの教師と生徒が相談して決める。指導の進め方や使用する教材は各教師に任されており、講義形式にしたり、生徒からの質問に答える形式にしたりと多様だ。

1人ずつ日時を決めて指導する場合もあれば、担当生徒をまとめて指導することもある。対象教科は実施回によって異なり、D3だった教科すべてであったり、特に克服したい教科を生徒が自ら指定したりと、適切な方法を模索中だ。初回は16年9月実施分の結果に基づいて17年1月に行い、1・2年生合わせて122人が受講。これまでに3回行った。

取り組みの特徴は、学習チューターの割り当てを、担当学年と異なる学年の生徒とすることだ。生徒と教師がなれ合わず、緊張感を持って学習に取り組ませ、そして、教師側に「オール桑北」で取り組み意識を醸成するねらいがある。

「多くの教師が担当教科以外を教えることになりませんが、教科の内容を教えるというよりも、教師が生徒に寄り添い、生徒が質問しなくてもできなかつた小・中学校段階の学習内容を指導して、つまづきを解きほぐしてほしいと伝えました」（井上先生）

この学習会は、教師が生徒のつまづきの要因に気づく機会にもなった。数学担当の中村誠一先生は、英語を担当した時の経験をこう語る。

「生徒の多くはじっくり学習する習慣が身についておらず、英語の長文問題を見ただけで『もう無理』と言う生徒もいました。考え

る前に諦めてしまうから、学力もつかないという悪循環に陥っていたのです。そこで、単語を指さしながら一つひとつ質問していったところ、少しずつ答えられるようになってきました。生徒にとつて、丁寧に取り組めばできるよくなるという経験になったと思います」

補習を行う一方で、やればできるという達成感や、次は頑張ろうという前向きな思いを持たせるために、表彰制度も充実させた。クラスの成績上位層だけでなく、D3を脱した生徒への「ジャンプ賞」、担任推薦や学年主任推薦の賞など、多彩な賞を設け、多くの生徒が受賞できるようにした（写真1）。「私も賞がほしい」「次は絶対に取る」と語る生徒も増えており、高いモチベーションとなっている。



写真1 「基礎力診断テスト」で成績上位だった生徒や、前回よりも伸びた生徒などを、学年集会などで表彰。校章が入ったオリジナルのメダルを授与している。

## 教師全員で現状を分析し、キャリア教育を見直す

基礎力診断テストの活用と並ぶもう1つの改革の柱は、キャリア教育の見直しだ。同校では、十数年前から、「総合的な学習の時間『みらい』」で、グループワークを通してコミュニケーション能力やソーシャルスキルを身につけるという取り組みを実施してきた。かつては全国的に注目されていたが、長年続けてきたことによる形骸化が見られていた。総合学習担当の西脇あずさ先生は次のように述べる。

「6年前に赴任した当時は、授業前日に何を行うのかを話し合うような状態で、さらに教師の異動が頻繁にあったため、取り組みの理念や指導ノウハウがうまく継承されていないことが課題でした。また、生徒が真剣に取り組まない様子も見られ、効果を疑問視する声もありました」

そこで、16年6月、井上先生を座長に据え、若手教師を中心とした「キャリア教育実行委員会」（現・キャリア教育委員会）を発足させ、高校3年間を見通した指導計画を構築するプロジェクトを始めた。

7月半ばに第1回職員研修を実施。全教師を1班6〜7人の計8班に分けて、学校の現状と課題を洗い出した。メンバーは、教科や年齢、勤務歴、性別がなるべく重複しないよう調整。本音で語り合えるよう、班ごとに1つの部屋を



写真2 第3回職員研修では、模造紙と付箋を使って、必要な取り組みを各学年・各学期で分類し、3年間の指導の流れを整理した。

割り当てた。すると、予定の2時間をオーバーするほど議論は白熱し、様々な意見が出された。キャリア教育委員会が、それらの課題をまとめ、既存の進路学習を「継続すべき取り組み」「再検討や改善が必要な取り組み」「廃止すべき取り組み」に整理した。それらを踏まえて、8月の第2回職員研修で、育てたい生徒像や学校をよりよくする方策について話し合った。そこで内容を再び委員会が集約し、育てたい生徒像を「社会人として適切に意思疎通を図る力を身につける。主体的に学び続ける態度を養い、地域や社会に貢献する」とした。

これを受けて、10月に第3回職員研修を実施。班ごとに、各学年・各学期において必要な取り組みを付箋に書き、模造紙に貼って、3年間の

流れをまとめていった(写真2)。付箋は、「他校で成功している取り組み」「本校で過去に行った取り組み」などで色分けし、前後のつながりや重複などを考慮しながら整理した。それを、次の委員会で集約し、自校に欠かせない「コアプログラム」として確定。続く、17年1月の第4回職員研修で、各プログラムの具体的な内容や実施方法について検討し、3年間のキャリア教育を体系化した。

「取り組みの枠だけ決めて内容を学年に任せてしまうと、学年によって差が出てしまいます。担当教師が変わる度に方法も変わります。担当教師が変わる度に方法も変わります。やがて形骸化してしまうでしょう。教師全員で理念から実施方法まで練り上げたことで、納得感や使命感を持って取り組めるようになったと思います」(井上先生)

### 生徒たちの意欲が企業からの評価を変えた

教師の思いが込められた各教育活動は、生徒の意欲向上にもつながっている。例えば、5月に約100の大学や専門学校、企業を招いて行われた「みらいセミナー」では、生徒は体育館に設けられたブースを積極的に回り、真剣に担当者の話を聞いたり質問したりしていた。かつての同校を知る地元の大学や企業の担当者からは「こんなによい学校になったんですね」「生徒の態度に感動しました」と言われたという。「みらいセミナー」は初めての企画だったが、

そうした挑戦は、生徒の自己肯定感を高めつつ、地域の評価も高めるという成果に結びついた。

### 取り組みの継続・発展と、成績中・上位層への支援が課題

一連の改革は、同校に大きな変化をもたらした。改革前は学年が上がるごとに、基礎力診断テストのD3の生徒が増えるという状況だったが、事前・事後指導を徹底した16年9月以降はD3の生徒が大幅に減り、17年6月に実施した3回目の「D3学習会」では、対象者が68人と1回目の約半数にまで減少した。

さらに、学力向上とキャリア教育の改革が相乗効果を生み、17年度の就職試験の1次試験合格率も過去最高を記録した。教師間には、全校体制で指導にあたる意識が定着し、17年度には全校を挙げて遅刻指導の再徹底が図られ、遅刻者数は1学期段階で例年の半数まで減少した。今後の課題は、取り組みの継続と成績中・上位層のサポートだと、岡田真次校長は語る。

「18年度から、本校は1クラス少なくなります。教師数も減っていく中で、取り組みをどのように継続し、発展させていくのかを、委員会などで議論しています。また、学力の底上げだけでなく、成績中・上位層を伸ばす指導も考えていかなければなりません。新しい学力観に対応するためにも授業改善の研修を充実し、『オール桑北』で一層の教育力の向上を図っていきたいと考えています」

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、1・2年次の進路学習のまとめとして志望理由書作成の観点を整理する「志望理由シート」について検討する。

# Before

静岡県立伊東高校  
稲葉 渉先生提供

「2年生 3学期  
志望理由シート」

## 課題

- 1・2年次の進路学習や過去の経験などにおける、自身のこれまでの学びや気づきを、将来の進路に結びつけて志望を語るができない生徒がいる
- 進路学習で生徒に考えさせてきた「社会とのかかわり」という観点をさらに生徒に意識させたい

## 検討メンバー



ツール提供者

静岡県立  
伊東高校

**稲葉 渉**

いなば・わたる



北海道  
北広島西高校

**徳橋孝之**

とくはし・たかゆき



群馬県立  
太田高校

**新井高広**

あらい・たかひろ

志望理由 (学問グループ) HRNO 氏名  
あなたの現在の志望進路先 (学校・学部・学科など) とその理由を、具体的に書いてください。その際、次の内容を含めること。

志望先 \_\_\_\_\_

① 「将来取り組みたいテーマ」と、そう考えるようになった「きっかけ」と「動機」

・きっかけ (将来取り組みたいことに関心を持つようになった出来事や経験)

・動機 (その出来事や経験から感じたことや考えたこと)

② 志望先で何を学びたいか (社会との関わり方を意識して)

③ 志望先で学んだことを社会でどう生かしたいのか。

④ なぜその志望先でないといけないのか (志望先に対するこだわり、他の学校と比べてどんな特徴があるか)

自己理解を深めながら  
志望理由書へつなげたい

静岡県立伊東高校では、2年生3学期に800字の志望理由書を作成する。それに向けて、1年次の学問研究、2年次の学部・学科研究の成果を具体的な志望に結びつけるため、冬季休業前に配布しているのが「志望理由シート」だ。生徒はこのシートに記入した上で担任との面談を行うが、志望理由がこれまでの進路学習の成果と結びついていない表面的な記述にとどまっていたり、将来、社会とどのようにかかわりながら生きていくのかということ意識できていなかったりする生徒もいる。自己と社会への理解を深められるよう、「志望理由シート」とその活用法の改善の必要性を感じていた。

# 2年生 3学期 志望理由シート

## After



### 改良ポイント

#### ① 過去、現在、未来と時系列に志望を深めさせる

最も興味・関心を持っていることについて、そのきっかけ、これまで取り組んできたこと、今後取り組むべきことと、過去→現在→未来のつながりで志望がどう固まってきたかを考えさせる。

#### ② 社会への参画意識から進路観に揺さぶりをかける

過去の経験からの志望の積み上げと並行して、社会問題を起点に進路を未来→現在と掘り下げる。興味・関心を軸に進路を考える際の切り口は、必ずしも1つではないことを生徒に実感させる。

### 志望理由シート

年	組	番	名前
---	---	---	----

①○をつけた項目について、興味・関心を持つきっかけとなった理由を書こう。  
※具体的な出来事があった場合はそれを交えて書こう。

②その項目について、今まで取り組んできたことを書こう。

③その項目について、これからの高校生活で取り組んでみたい、または取り組むべきだと考えていることを書こう。

**1 START** 興味・関心のあることをたくさん書き出そう。その中でも一番強く興味・関心を持っていることに○をつけよう。

**2 RESTART**  
社会が抱える課題などで気になっているものを書こう。一番強く興味・関心を持っているものに○をつけて、④から①へと逆の順番で考えてみよう。

**GOAL**  
その項目は、社会とどうつながっているのか。その項目への興味・関心を追究することで社会にどんな貢献ができるのかを書こう。

④その項目について、進学して取り組んでみたい、または取り組むべきだと考えていることを書こう。

★具体的な志望校が決まっている場合は大学・学部名を書こう。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介!

進路を考える観点を構造的に理解できる様式へ

志望理由書を作成する際のよりどころとなるものは、生徒一人ひとりの内面にある進路学習を始めたときの様々な経験である。過去の経験が礎となって進路が拓かれていくことを実感させるため、過去、現在、未来という時間軸を「志望理由シート」上でも明確にし、生徒が自身の中に眠っている進路の芽を段階的に掘り起こし、積み上げるプロセスを自覚できるような様式を目指した。また一方で、過去からの積み上げと並行して、今の時点で自分が抱えている現代社会への課題意識から大学で学べること、高校生のうちに取り組みべきこと……と掘り下げて考えさせることで、多様なアプローチで自分と進路を深められることを可視化した。

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

39 VIEW21 February 2018

## 2年生 3学期 志望理由シート



## 活用の流れ

1

これまでの  
学びや経験を振り返って、  
シートに記入させる

2

記入したシートを基に  
担任との面談で深め、  
教師は「なぜ？」を丁寧に問う

3

志望理由書にまとめる

ポートフォリオを使いこなす  
豊かな視点を生徒に育む

議論の中心になったのは、生徒が過去の経験を交えた自分らしい言葉で志望を語れるようになるための指導だ。2年生3学期に作成する志望理由書は、進路学習の一里塚であり、この時期に進路観を揺さぶることで、3年生の夏までに志望の軸をつくらせることができる。そのため、「志望理由シート」も埋めることを目的とするのではなく、自分自身のことを多面的に振り返るための材料として、思いついたことから書き出していけばよいということを確認した。また、身近な社会人や担任自身の進路選択についての話を聞かせる

という案が出された。人生は成功体験だけでなく、失敗や偶然の積み重ねによってつくられるということを学ばせることで、生徒が自身のポートフォリオを作成したり振り返ったりする際の視点が豊かになり、学びや経験にも価値づけできるようになるからである。そのほか、生徒の視野を広げるために、自分が挙げた興味・関心、社会課題に関連する新聞記事をシートの裏面に貼りつけるという案も出された。また、シートをA3サイズにして記入スペースを広げ、2年生3学期を通して気づきを書き込み続けられるものにする。進路は考え続けるものであるということを生徒に伝えられるのではないかとという声も上がった。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、  
ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

## 組織的なキャリア教育の構築が必要な時機

静岡県立伊東高校 稲葉 渉 いなば・わたる



説得力のある志望理由を書くためには、過去の経験における自分の変化を見取れるポートフォリオが必要だ。さらに、社会課題から将来の進路や高校時代すべきことを考えるためには、教師のサポートも重要だ。ポートフォリオは、経験の整理を円滑に行えるように見通しを持って作成し、それを使って教師が生徒と「なぜ」「どうして」と生き方を探究する面談を行いながら深めていきます。面談を重ねるうちに、生徒は少しずつポートフォリオに価値を見いだしていきます。また、社会とのかかわりの視点を生徒に与えるためには、私たち教師ももっと社会を知る必要があります。新聞を読み、気になった記事を切り抜き、自分の意見を書き添え、さらに関連する教科書のページを示すといった指導があつて初めて、生徒は社会とのつながりから進路を考えられるようになるのではないのでしょうか。社会課題と教科とのつながりを示すことも含めて、学校全体でキャリア教育のあり方を共有すべき時機にきていると感じます。

稲葉先生プロフィール 教職歴22年。同校に赴任して13年目。1学年主任。地理歴史・公民科。「生徒や学校を地域など様々なものとしてつなぎながら、生徒の確かな成長を実現させたい」

学校プロフィール 全日制／普通科／共学／1学年約1600人／2017年度入試合格実績（現役のみ）／国公立大は、筑波大、静岡大、名古屋大、広島大などに33人が合格。私立大は、中央大、法政大、立命館大、関西大などに延べ288人が合格。



## 「何をしてきたか」からも進路を考えさせる

北海道北広島西高校 徳橋孝之 とくはし・たかゆき

生徒が自身の過去と対話しながら「将来取り組みたいこと・今取り組むべきこと」を考えるためには、ポートフォリオは非常に重要です。実際、推薦・AO入試では、進学して何を学びたいのかに加えて、高校生活で何をしてきたのかを語ることが求められます。高校生活と大学での学びが、生き方としてつながるような選択が生徒にとって一番幸せであり、また、そうした志望は説得力を持つでしょう。さらに、改訂したシートに盛り込んだ「社会課題から生き方を考える」という指導は、市民教育としてもますます重要だと感じました。

本校には、長い文章を書くのが苦手な生徒が少なからずいます。そのため、本校で「志望理由シート」を使う時は、小さなサイズにするのがよいと考えています。また、指導で活用する前に教師が実際に書いてみることで、どこで生徒の手が止まりそうかが分かるはずです。複数の教師が取り組む書きにくかった箇所を学年で共有することで、指導力の向上にもつながるはずです。

**徳橋先生プロフィール** 教職歴15年。同校に赴任して6年目。教務主任。英語科。「不決断は最大の害悪。まずは前進」

**学校プロフィール** 全日制/普通科/共学/1学年約290人/2017年度進路実績(現役のみ)/国立大は、北海道教育大岩見沢校に1人が合格。私立大は、北星学園大、北海学園大、北海道商大などに延べ88人が合格。短大進学15人、専門学校進学109人、就職63人。



## 思いを書き留め続けさせ、面談につなぐ

群馬県立太田高校 新井高広 あらい・たかひろ

今回、職業から大学・学部を考えるだけでなく、過去の経験を丁寧に掘り起こしたり、社会課題への関心を高めたりしながら進路を探究させる重要性を改めて実感しました。

私がこの「志望理由シート」を使う時は、「志望が具体化していない人は、迷っていること、気になっていいることを、まとまりがなくともよいのでたくさん書き出すように」と生徒に求めると思っています。「志望理由シート」も、それを経て書き上げる志望理由書も面談の材料であり、生徒を理解するための情報だからです。特に、「志望理由シート」は1回で書き上げるのではなく、その後の面談などの気づきを生徒が書き加えていけるものにしたいです。たとえシートを書き終えられなくても、考え続けることに価値があることを生徒にしっかり伝えることが重要です。また、過去の経験から志望を積み上げていくシートと、社会に対する課題意識から進路を掘り下げていくシートの2枚に分けた方が、進路探究の観点の違いが生徒には伝わりやすいかもしれません。

**新井先生プロフィール** 教職歴26年。同校に赴任して9年目。進路指導部。数学科。「正しい道を選ぶのではなく、選んだ道を正しいものにできる生徒を育てたい」

**学校プロフィール** 全日制/普通科/男子校/1学年約280人/2017年度入試合格実績(現浪計)/国立大は、東北大、東京大、東京工業大、一橋大、京都大などに150人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ589人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

### 指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。



# 体験的な学びを通して自分に向き合い キャリアを創る視点を磨く

法政大学 キャリアデザイン学部



## 体験的な学びを通して、論理的な思考力を鍛える

多くの社会人や地域の人たちとかがかわる中で、自分のやりたいことを相手にも共感してもらい、ともに課題を解決するためには、論理的に考えて物事を進めなければならないことを実感しました。(檀山さん)

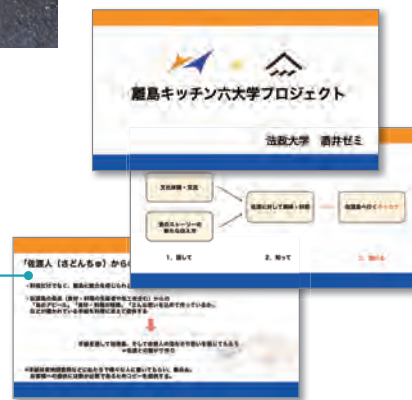


## やる気をアピールすることで 学びがどんどん広がる

待っているだけでは学びは広がらないと実感しています。私は、2年次のインターンシップで訪れた出版社に自ら交渉して、3年次もインターンシップを継続させてもらっています。(永田さん)

## 企業や自治体との協働で、 実践的なマーケティングを学ぶ

ゼミ活動では、企業や自治体と協働でプロジェクトを進めていきます。責任も伴い大変ですが、実践的なマーケティングを学ぶことができ、社会人としての対応力も身につけられました。(下池さん)



キャリアデザイン学部  
キャリアデザイン学科3年  
**下池瞳華**  
しもいけ・とうか  
東京都立文京高校卒業。  
サービス業への就職を志望。



キャリアデザイン学部  
キャリアデザイン学科3年  
**檀山ゆりか**  
はぜやま・ゆりか  
埼玉県立和光国際高校卒業。  
キャリアカウンセラーを志望。



キャリアデザイン学部  
キャリアデザイン学科3年  
**永田紗也**  
ながた・さや  
埼玉県・私立浦和明の星女子中学・高校卒業。  
出版業界への就職を志望。

## 社会の中での自分を 相対化して捉えていく

生き方や働き方の多様化や変化に伴い、自分のキャリアを設計し、状況に応じて修正する力がこれまで以上に求められている。法政大学キャリアデザイン学部は、自身のキャリアをデザインするとともに、他者のキャリアを支援する力の育成を目指している。

1年次は、キャリアデザイン学を全般的に学び、2年次以降の授業では、体験的な学びをベースとして専門科目を履修する。体験型選択必修科目では、企業でインターンシップを経験する「キャリア体験学習」、高校などでキャリア教育を実施する

「キャリアサポート実習」など、6科目から1つを選択。企業や地域での体験学習を通して、学生は社会の中での自分を相対化して捉え、その後の学びにつなげていく。出版社でのインターンシップを経験した永田紗也さんは、次のように振り返る。

「実習先では、学生でも社員同様に厳しく接してくださり、自分の発想の乏しさや知識不足を痛感しました。しかし、『何でもやります』と積極的に仕事に取り組んでいると、フリーペーパーなどの企画や取材、執筆も任されるようになりました」

また、ブライダル企業でのインターンシップを経験した下池瞳華さんは、「憧れの業界で働くことができたのに、自分は受け身の姿勢だったと反省しています。その後の授業やゼミ活動では、多角的な視点から考えて、自分から積極的に提案していくことを意識しています」と語る。

## 企業や自治体との協働で 論理的な思考力を育む

2年次後半からのゼミ活動も、体験的活動を中心に展開する。マーケティングを研究する「酒井ゼミ」では、企業や地方自治体と連携したプ

ロジェクトの運営などを行う。学生はプロジェクトのコアメンバーとして参加するが、どのプロジェクトでも、連携先が実際に抱えている課題を解決するための提案が求められるため、ハードルは高い。

そうした経験を通じて実感することの1つが、論理的な思考の大切さだ。長野県飯田市の伝統工芸・水引を活性化させるプロジェクトを推進する榎山ゆりかさんはこう語る。

「初めは自分の好みといった感覚で企画を考えていましたが、それでは相手を納得させられません。現状や課題をしっかりと分析し、『なぜそうするのか』を論理的に説明することの大切さを実感しました」

榎山さんは、水引が衰退した一因は祝儀袋などが使われなくなったことにあると分析。東京・神楽坂でのイベントで、水引をつけたメッセージカードを作るワークショップを開き、若い世代を中心に好評を得た。

下池さんは、日本各地の郷土料理を月替わりで提供する飲食店で、新潟県佐渡島の魅力をアピールするプロジェクトに参加した。実際に島を訪れ、生産者の方の話を聞いたり、現地調査を行ったりして、メニュー

を考案。仕入れ先との交渉なども行っている。

「自分1人で考えるより、企業や地域などの人の話を聞くことで新しい発想が生まれることを実感しました。また、仲間と仕事を分担し、1つの目標に向かうことも意識するようになりました」（下池さん）

## 体験を通して気づきを重ね 自身のキャリアを設計

社会の中での自分を意識すること、将来のキャリアを具現化していく。永田さんは次のように話す。

「私は、カメラメーカーと共同で、SNSを使った販売促進企画を考えるプロジェクトに参加しました。出版業界志望ですが、この経験を通して、多様なメディアを活用して表現することの面白さも知りました。自分、社会の中でどのように貢献できるのかを考えてスキルを高め、キャリアを築いていきたいと思います」

「自分はアイデアを考えることが得意だと思っていました。様々な活動を通して、人にかかわり、影響を与えることの意義深さを実感し、人を育てる仕事に就きたいと思うようになりました」（榎山さん）

## 大学の思い

### 社会の中の自分を見つけて 意欲や目標を高めていく



キャリアデザイン学部  
教授  
酒井 理  
さかい・まさひろ

将来の変化を予測することが困難な時代を迎え、求められるスキルも多様化しています。そうした社会で自立するには、自ら学び続け、求められるスキルを習得していかなくてはなりません。そのため学びの方法を身につけさせることが、本学部のねらいです。本学部では、企業や地域と連携した体験的活動を早いうちから行うことを大切にしています。そうした経験を通して、社会の中での自分を意識したり、不足している力に気づいたりして、より高い意欲や目標を持って学ぶようになりま。実際に、インターンシップで自分のふがいなさを感じてくじけそうになりながらも、奮起して前向きに学びを進める学生は少なくありません。

ゼミ活動では、課題の分析に基づいて仮説を設定し、実際にプロジェクトを展開して、検証論文を作成します。そのプロセスは、社会科学における「実験」であり、常々論理的に思考することの大切さを指導しています。そうした身についた思考力が実際の社会で役立つものであることは、多方面で活躍する卒業生の姿にも表れています。



# 1年次から社会とかかわり、多分野で活躍するかおりの専門家を目指す

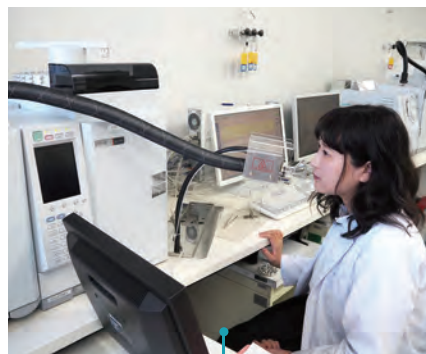
大同大学 情報学部 総合情報学科 かわりデザイン専攻\*

\* 2018年4月から工学部建築学科に編入



## 現役の調香師による実学的な授業で香水作りを学ぶ

世界的に活躍する大手化学メーカー・化粧品メーカーの調香師の指導を受け、自分のイメージする香水を作りました。香料を混ぜ、理想のにおいをつくるのが予想以上に難しかったです。(畠中さん)



## 企業でも用いられる においの測定法を学び、 国家資格を取得

測定には、分析機器による測定法と人の嗅覚による測定法があります。国家資格である臭気判定士が測定の際に使用する機器も整備されていて、就職後にも役立つ技術を学べます。(近藤さん)

## インターンシップで得た 学びを後輩に伝える

インターンシップ報告会では、自分の体験をまとめて発表します。学年を超えて交流する機会が多く、私も先輩の卒業研究発表会に参加して、自分の研究テーマを決める参考にしました。(小崎さん)



## 進路を意識した授業で 視野を広げさせる

「実学主義」の教育理念の下、産業界から必要とされる人材を送り出してきた大同大学。2010年度に全国初のかおりを専門的に教育・研究する「かわりデザイン専攻」を新設し、この分野のスペシャリストの育成を目指して、実践的なカリキュラムを展開している。

1年次では、におい・かおりの基礎を学ぶ。生活の中でのにおいやかおりと例えば、香水やシャンプーなどをイメージする学生が多いが、そうした固定概念を転換させるため、フィールドワークを実施。学生は、自分の住む地域のおいを調査して



工学研究科 都市環境  
デザイン学専攻1年

**近藤早紀**

こんどう・さき

愛知県立横須賀高校卒業。大学院で研究を深めながら、将来を検討中。



総合情報学科  
かわりデザイン専攻4年

**畠中 梢**

はたけなか・こずえ

三重県立四日市南高校卒業。メーカーに技術開発者として就職予定。



総合情報学科  
かわりデザイン専攻3年

**小崎有紗**

こざき・ありさ

愛知県立新川高校卒業。化粧品メーカーへの就職を希望。

地図にまとめ、発表する過程を通して、自然や工場、ゴミなどにおいても学びの対象であると理解する。

また、本専攻の学びは、化粧品や生活用品以外にも、住宅や自動車、家電など多分野にわたって生かせるということに気づかせるため、先輩たちのインターンシップ報告会や卒業研究発表会にも参加させている。

さらに、協働性や主体性などの社会人基礎力の育成にも力を入れていく。1学年約30人と少人数のため、ほぼすべての授業で発表の機会が設けられており、4年生の畠中梢さんは、「1年次には、発表資料の文字が小さいなど、内容以前の問題を指摘されていました。多くのプレゼンテーションを経験し、今では、質疑応答を想定して、事前にしっかりと準備できるようにになりました」と語る。

## 第一線で活躍する社会人から 生きた知識や技術を学ぶ

2年次からは、実際において・かおりの測定・分析などをする実験や実習がスタートする。

特徴的なのは、化粧品メーカーなどのにおい・かおり分野の第一線で働く社会人講師による授業だ。例え

ば、2年次の科目「かおり成分と調香3・4」は、すべての授業を社会人講師が行っている。大学院1年生の近藤早紀さんが特に印象的だった授業は、「嗅覚測定法」の授業だと言う。

「ににおいの測定法の考案者から、その過程で試行錯誤されたお話を聞きました。この世界は未知の領域が多いため、重さや長さのように簡単に数値化できません。そのような中で測定法を開発していくことの難しさを知り、驚きの連続でした。化粧品に興味があり入学したのですが、視野が広がりました」

また、3年生の小崎有紗さんは、次のように語る。

「化粧品業界で働く講師から仕事の話聞いて、化粧品の研究職を目指すしたいという目標が明確になりました。化粧品メーカーで2週間のインターンシップを経験し、今の学びを社会でどう生かせるのかも分かり、より学びに力が入っています」

## 企業との共同研究を リードできるまでの人材に

におい・かおり分野の研究に取り組む大学が少ないこともあり、本専

攻には多くの企業から共同研究の案件が舞い込む。多くの学生は卒業研究で企業との共同研究に取り組む。近藤さんもその1人だ。

「芳香剤メーカーと共同で、芳香剤のかおりの持続時間や効率的な使い方を研究しました。ただ、企業にはにおい測定の専門家がいなかったため、測定には予備実験が必要で、かなりの時間を必要とするということとを理解してもらおうのに苦労しました。また、企業には、スケジュールや予算があり、そのような制限の中でいかに成果を出すかを学ぶことができました」

1年次から、社会との接点を多く設け、学生は目標を明確化させながら学びを深めていき、自ら進路を切り拓いていく。

「私は、自分の考えを提案する授業にやりがいを感じ、新商品開発に携われる技術開発者を目指し、消臭剤の芯と同じ素材のペン先を扱っているメーカーから内定をもらいました。卒業研究では、企業と共同で不快臭を模したにおいをどのようにつくるかを研究中です。社会人の方から多くのことを吸収し、就職後に生かしていきたいです」(畠中さん)

## 大学の思い

### におい・かおり分野の 先駆者となる人材を育成



情報学部総合情報学科  
かおりデザイン専攻  
教授  
光田 恵  
みつた・めぐみ

におい・かおりの専門家は、様々な業界で求められています。例えば、自動車メーカーや家電メーカー、食品・生活用品メーカーなどです。そのため、1年次から、多方面で活躍する卒業生や社会人の姿を見せ、視野を広げて進路を考えられるようにしています。

また、におい・かおりの分析などには理数科目の基礎知識が必要となるため、1年次には、研究に必要な数学と化学の基礎を学びます。

さらに、少人数や個人での発表を盛り込み、主体的に取り組める授業を多く用意しています。学内で得た知識や技能を試す場として、インターンシップや企業との共同研究の場を設け、卒業までに即戦力として活躍できる人材の育成を目指しています。

におい・かおりの分野は、私たちの暮らしに密接にかかわっているながら、研究の歴史は浅く、まだ解明されていないことがたくさんあります。既存の理論を使って学ぶだけではなく、新しいことに挑戦しながら学びたいというチャレンジ精神旺盛な学生を待っています。

## これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 日賀優一

「答えが1つではない問い」を考える高校生向け対話型ワークショップを開催する「三四郎の学校」事務局長。本誌2016年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。

### 実践事例

# 授業デザインを考える研修会

## ——長崎県の若手・中堅教師による自主研修会レポート——

学校をチーム化させる会議・研修にするための工夫や配慮を紹介してきた本コーナー。今回は実践事例として、長崎県の若手・中堅教師有志が企画した自主研修会を取り上げます。同研修会には、県内を中心に公立・私立の高校教師、中高一貫校の中学校教師が参加し、これまでにほぼ年1回

のペースで計8回実施されてきました。激変する教育環境に向き合うために、参加者が経験や思いを率直に語り合い、自校に帰って「一歩」を踏み出すきっかけがつかめるように、本コーナーで取り上げてきたような様々な工夫や配慮がなされた研修会でした。その内容をレポートします。

**日時** 2017年11月25日(土) 13:30～18:30

**対象** 県内教職員、教育を志す大学生・大学院生(合計約60人が参加)

- 目的**
- ・次期学習指導要領が目指す教育のあり方に関する講演・対話を通して、参加者がこれまでの教育活動のあり方について振り返る研修とする。
  - ・「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るための授業改善に取り組む上で必要な校内研修のあり方について、先進校の取り組み事例を通して考える研修機会とする。
  - ・授業改善に取り組んでいる教員の意見交換の場を設定することで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図るための授業改善の活性化につなげる。

### プログラム

- 13:30～13:50 **【アイスブレイク】**  
**主催者による趣旨説明とグループでの仲間意識の醸成**  
 この日、各参加者はお菓子を持ち寄りました。「なぜ、そのお菓子を選んだのか」を語りながらグループで交流を深めました。(写真1)
- 13:55～14:55 **【講演】**  
**先進事例から考えるこれからの教師に求められるもの**  
 生徒の主体性を引き出すために新しい取り組みに挑戦した現役教師の講演を聞き、これからの教師のあり方を考えました。
- 15:15～17:05 **【対話】** **グループ内での経験、疑問の共有**  
 授業デザインに関するキーワードを盛り込んだカードを使って対話を重ね、それぞれの経験から学び合いました。(写真2)
- 17:15～18:30 **【振り返り】** **今日の研修を明日につなげる**  
 1日の活動の気づきと今後の決意をグループ内で共有し、授業デザインの作成に向けて決意表明しました。
- 18:30～ **希望者による懇親会**



写真1 参加者は、地元の銘菓や高校時代に好きだったお菓子を持参。



写真2 授業デザインに関するキーワードをヒントに話し合う。

## 成果を確認して初めて 課題を受け止められる

今回の研修会の企画・運営メンバーの先生方がプログラムを検討する際、特に留意したのは、「参加者にたくさん話してもらおう」「研修での気づきを、変化の種火として長くとどめてもらおう」という2点でした。そこで、講演後すぐに参加者同士で感想を共有する時間を設けるなど、話を聞くだけにならないように配慮したそうです。また、話し合いでは、「断定せずに、異論を受け止めよう」といった心得を説明していました。そして、研修会の最後には、参加者にグループ間での交流の継続を求めました。実際、あるグループは「悩みがある時は相談し合おう」とe-mailで連絡を取り続けているとのことです。

現場の先生方ならではの視点として、例えば、振り返りの方法を話し合った時には、『「必ずやるべきことは？」』などと問い詰めるのではなく、『「やりたい自分は？」と尋ねた方が正直な思いが聞けるのではないか』といった声が上がったそうです。思考を活性化させる問いを追究することは、会議・研修においても重要なのです。

# 1

## 講演

### 感想の共有や質疑応答を挟み、 受け身にならない講演をつくる

グループ内で自己紹介と仲間意識醸成のための活動の後、最初のプログラムである講演が行われました。内容は、他県から招いた公立高校校長が、過去に挑戦した「生徒が地域の未来を語り合う体験的な学習」について、その実施の背景と成果を語るもので、目的は、「これからの教育に求められるもの」「教師として新しい一歩を踏み出す必要性」について参加者に考えてもらうことです。

30分の講演後、10分ほどグループ内で講演の感想を共有し、全体で質疑応答が行われました（\*1）。講師が参加者の「なぜ、そんなことができたのか」といった疑問に答えながら「一歩を踏み出した思い」を語るようにしたのは、講師が伝えたい思いを、参加者が引き出した形にしたかったからだそうです。それも、参加者がこの場の主体であることを意識してもらうための配慮と言えます。



講演の後、すぐにグループで感想を共有。話し合いの時間を確保することで、参加者は「主体は講師ではなく、自分たちである」ということを意識することができていました。



グループでの話し合いがウォーミングアップとなり、全体の質疑応答も活発化していました。グループ内で共感や疑問を共有することで、大局的な視点での発言が出やすくなります。

## 「共感」「違和感」「疑問」など 感想を出しやすい切り口を提示する

参加者には講演を聞きながら「共感」「違和感」「疑問」を3色の付箋紙に書き留め（\*2）、講演後の感想の共有は付箋紙を見ながら行っていました。あえて「違和感」といったネガティブな切り口も提示することで、「この場ではどんな感想を語ってもよい」ということが、参加者に明確に伝わったようです。付箋紙は講演終了後、会場内に掲示することで、参加者全員の意見共有としても役立っていました。



\*1・2 関連する内容を本誌12月号の同コーナーP.45で取り上げています。

## 2

### 対話

# カードを手がかりに気軽に自己を探究し、他者に開示



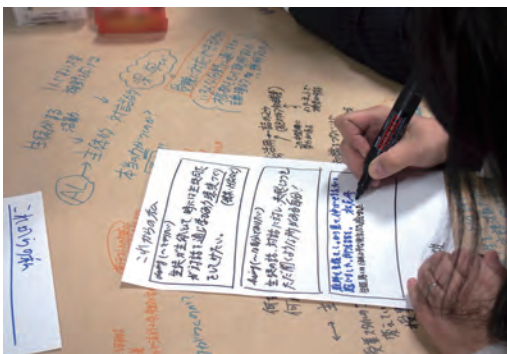
「揺さぶる」「低めのハードル」「自分らしさの表現」など、教師が語りたくなる授業デザインのフレーズが書かれたカードから気になったものを選びます。



自分が選んだカードをグループのメンバーに見せながら、自分の体験や悩みを話します。カードが手がかりになって自己開示しやすくなり、発言の機会も均等に保障されました。

探究的な学びを組織的に推進し、校内研修も活発に実施している県外私立高校の教師を講師に、授業デザインヒントを39のフレーズで言語化したカード（\*3）を使って、参加者はこれまでの実践、そして抱えている疑問や不安を共有しました。参加者同士の対話の前後には、講師が、自分の体験を他者と共有する際の対話の心得（\*4）や、対話によって教師はどのように成長できるかと

いったり取り組みの意義を語りました。特に、自分の体験や思いを話すこと以上に、他者の言葉に耳を傾けることの大切さが丁寧に説明されました。授業デザインのヒントが書かれたカードをテーブルに並べ、その中から自分が気になるものを選ぶことで、参加者は「自分を語るきっかけ」を得ることができず。それも、経験や立場に左右されない、自由な話し合いを促す工夫の一つと言えます。



これからの自分について、「今後の目標」「その実現のために、あるべき自分の状態」という2つの観点で、この日の成果を各自まとめました。



研修での気づきとこれからの決意をグループ内で発表。お互いに1日の頑張りをたたえ合い、前向きな気持ちで仲間との活動を終え、それぞれの学校に戻っていきました。

振り返りの目的は大きく2つです。1つは、講演と対話から参加者がそれぞれ何を得たのかを語り合い、学びの多様さを実感すること。もう1つは、今後の決意を言語化し、具体的に明日からの行動変容につながるエネルギーとしてもらうことです。振り返りの方法として、まずはいたんグループを解体して、ほかのグループの人と研修の成果を共有しました。多様性を確認すると同時に、

たくさんの人に出会い、みんなでの研修に取り組んだという一体感を味わってもらうためだそうです。その上で、再び元のグループに戻り、A4判紙に「これからの私」というテーマで、「今後の目標」と「その実現のために、あるべき自分の状態」を書きました。グループで一人ひとり振り返りの内容を発表する際には、どのテーブルからも仲間をたたえる拍手の音が聞こえてきました。

## 3

### 振り返り

# 研修での気づきや決意を言語化し、仲間と共有する

\* 3 研修で使用したカードと同様の機能の「アクティブ・ラーニング・パターン《教師編》」が、(株) クリエイティブシフト (代表: 井庭崇・慶應義塾大学総合政策学部准教授) と (株) ベネッセコーポレーションによって共同開発され、高校の先生向けに紹介・配布されています。

\* 4 関連する内容を本誌6月号の同コーナー P.45 で取り上げています。

## 研修のあり方そのものを 学校に持ち帰り、生かしていく

長崎県立長崎南高校 **田崎一哉**

たさき・かずや

教職歴27年。同校に赴任して8年目。

1学年主任。進路指導部。英語科。

若手・中堅教師による自主研修会の企画・運営メンバーの1人。



### 教師同士の対話における工夫・配慮は 生徒との対話においても有効

若手・中堅教師による自主研修会がスタートした背景には、「変わらなければ」という危機感がありました。教育環境が変化する中、従来と同じ指導観・方法では行き詰まるのは分かっているけれども、1人で考えても現状を打破する方法が見えてこない。それならばみんなで考えようと、企画メンバーとして有志が集まり、「チーム長崎」をスローガンにスタートしました。メンバーはミドルリーダー層ですが、実際には高い改革意識を持つベテラン層も積極的に参加し、公立・私立の区別なくそれぞれの知見、そして危機感と展望を持ち寄っています。

当初、研修会は著名な講師の話聞くことが中心でしたが、6回目から会を進行するファシリテーターを置き、参加者同士の対話に多くの時間を割くようにしました。初めてファシリテーターから「受け入れがたい意見でも否定をせず、『なぜ、自分はこの意見に反対なのか』と考えてみてください」「沈黙は議論をサボっているのではなく、より深く考えている行為だと受け入れてください」などと話し合いのグラドルールを提示された時は、正直、そんなものでうまくいくのかと思いました。ところが、実際に対話が始めると、みんな自分の意見をどんどん言うのです。対話の心得を丁寧に説明することの効果の大きさにとても驚きました。

研修会で学んだことは、学校での生徒との対話でも役立っています。「否定しないでまずは耳を傾ける」「沈黙を恐れず、生徒の言葉を待つ」など、こちらが心に留めておくと、生徒はとてもよく自分を

語ります。また先日、1学年の先生方と「生徒を前向きにする」というテーマで話し合いをした時は、いろいろな教科の視点から自由に意見を言っていたきたかったのが、教科やキャリアにとらわれないグループをつくって進めました。職員室でワイワイガヤガヤと生徒のことを語り合う時の雰囲気でも会議ができた気がしますし、後日、いつもは厳しく生徒を見守っているベテランの先生が、ほかのクラスの先生に「あなたのクラスの生徒はここがいいね」と褒めている様子を見て、会議での体験を生かして下さっているのかなとうれしくなりました。

### 学校の会議・研修にも 工夫できる余地はたくさんある

今回の研修会の後には懇親会を行い、たくさんの先生が参加してくださいました。私自身は、「懇親の場でないと本音が言えない」という考えではありませんし、懇親会への参加を強いるのも大反対です。その前提の下で、会議とは違った雰囲気ですらに話ができる場合は、価値があると思うのです。だから、懇親会でなくてもよいので、話したい人と自由に語り合える時間を、会議や研修の中に組み込む工夫をしたいです。コーヒーを片手に、あえて机のないスペースで立ち話のようにフリートークをしてみようのも一案だと思います。工夫次第で自由に気軽な会議はできるはずです。

会議や研修は、目的に合わせて進め方を大胆に変えていくことが必要です。そのためには、会議や研修を企画・運営する私たちが、ファシリテーションのスキルを学ぶことも大切です。今は九州にもそうした機会は増えています。学びのために一步を踏み出すチャンスは、私たち教師の前にもあるのです。

## 2017年12月号・特集へのご意見

### 「チーム学校」の重要性

事例校の取り組みなどを通して「主体的・対話的で深い」思考が必要なのは教師自身であり、その場と時間を確保するマネジメントが必要だと感じた。そのためには、管理職のトップダウンによるリーダーシップと、最前線で授業や生徒指導にあたる教員のボトムアップのバランスが重要で、基盤となる教師間の信頼関係を築き、その資質・能力を最大限に引き出す「チーム学校」をいかにつくり上げるかという不易の重要性に、改めて気づかされた。北海道・札幌市立札幌開成中等教育学校 松澤剛

### 社会と向き合い、かかわり合うための「発信力」

千葉県立幕張総合高校を始め、これまで誌面で取り上げられてきたどの学校も、「生徒に育みたい資質・能力」を校内で十分検討して具体化し、指導方針を明確に示して、学校全体が大きく動き出している様子が伝わってくる内容であり、非常に参考になった。国際的に活躍できる人材の育成が求められているが、国際的な場では、発言

の機会を自らつくらないと自分の意見を知らせてもらうことはできない。受け身で対処するのではなく、社会や世界に主体的に向き合い、かかわり合っていける人材を育てるためにも、千葉県立幕張総合高校が重視した「発信力」はとても大切だと考えている。 富山県 匿名希望

### 日々の活動の中で熱く議論できる職場づくりを

岡山県立林野高校が、学校経営計画に教師同士で語り合った言葉を入れていることは、教師の主体性を引き出す上で非常に重要だと感じた。また、育みたい資質・能力を教科指導に落とし込むことにより、教師自身が教科指導の目的を深化させていることに共感した。一方、校内でワークショップを行い、学校が目指す方向を深化させることが昨今重視されている。そのこと自体には賛成であり、私も積極的に推進している。ただ、そういった場がなくても、日々の活動の中で熱く議論できる職場をつくり、発信できる教師を育てたいとも考えている。 岩手県立大船渡東高校 川村俊彦



### 教育ちょこっとーク

#### テーマ

### 今年度、生徒から言われて 一番うれしかった言葉

- 先生が話を聞いてくれるので安心できる。 愛媛県
- 先生の言葉を信じて頑張ります。 山梨県
- 先生の授業は分かりやすい。 長崎県
- 先生の古典の授業を受けて、将来は国語の先生になると決めました。 山口県
- 僕の目標は先生を越えることです。 和歌山県

## 『VIEW21』高校版 読者モニター を

### 募集しています!

『VIEW21』高校版編集部では、「現場とともに考える」情報誌をつくるため、『VIEW21』高校版に対するご感想やご意見をお寄せいただける先生方のご応募をお待ちしています。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、  
下記のいずれかの方法でご応募ください

① 下記2次元コードを読み取ってアクセスいただき、必要事項をご記入の上、ご送信ください。



② 学校名、お名前、分掌、ご教職歴をご記入の上、下記の e-mail アドレスにご送信ください。

view21\_since-1975@  
@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉『VIEW21』高校版・読者モニター募集でご提供いただく個人情報は、アンケートの集計・分析による VIEW21 誌面評価、企画開発、VIEW21 誌面・ウェブサイトへの掲載、教育情報の提供ならびに謝礼の発送の目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じる場合があります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。  
(株)ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）  
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

### 編集後記

今号の「大学の学び 最新ナビ」で取り上げさせていただいた、法政大学キャリアデザイン学部の取材では、実際のゼミ活動にも参加させていただきました。その日は、企業の方も交えて、次の活動に向けた企画案を検討されていましたが、それぞれが考えてきたアイデアをぶつけ合い、議論する様子から、学生の皆さんの熱意やチーム力を感じました。大学での学びを通して、社会で求められる実践力を身につけるだけでなく、自らの志を見つけ、突き進んでいく姿に元気をいただきました。彼らが社会に出て、それぞれのフィールドで活躍されていくことを心から応援しています! (北澤)



## VIEW21 高校版 2018 4 月号

次号は 4 月 16 日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年 6 回の発行です

## 教師を育てた 言葉たち

No. 006

京都府・京都市立銅駝美術工芸高校

### 渡邊野子先生

わたなべ・なおこ

◎教職歴19年。同校に赴任して6年目。企画推進部主任。美術工芸科。

京都府・京都市立銅駝美術工芸高校 全日制／美術工芸科／共学／1学年約90人／2017年度入試合格実績（現浪計）：国公立大は、金沢美術工芸大、京都市立芸術大、広島市立大などに31人が合格。私立大は、成安造形大、京都精華大などに延べ67人が合格。



**生** 徒は誰もが大きな力を秘めています。一人ひとり成長の仕方やスピードが違うので、私たち教師はつい見逃していることがあるかもしれません。しかし、今はまだ見えなくても、すべての生徒が美しい力を持っていることを、私はたくさんの生徒から教わってきました。A君もその1人です。

A君は、教室では独りで過ごすことが多い生徒でした。独りでいることは悪いことではありませんが、持っている能力を社会で生かしていくためには、人とつながるスキルも身につけてほしい。そして、クラスの生徒たちには、お互いの個性を受け入れ、生かし合える力を養ってもらいたい……担任の私はそう思いました。

まずはA君のことを理解しようと、時間を見つけては彼と話をしました。自分が居心地がよいと思うことや困っていることを私に伝えることで、他者とつながる経験をしてもらいたかったのです。その一方で、人とかかわるのが得意な生徒には「いつも独りでいる子がいたら、みんなとかかわれるように気にかけてほしい」と話し、生徒同士の自発的な働きかけも促しました。

当初、A君との会話はぎこちないもので、彼も私に打ち解けた様子を見せてくれませんでした。かわり方が間違っているのだろうか不安になることもありました。それでも数か月すると、次第にA君から私に話しかけてくるようになり、さらにしばらくすると、ほかの生徒がA君に勉強を教えようという場面なども見られるようになりました。

**1** 年が過ぎたある日、A君は「話を聞いてほしい」と私のところへやってきました。そして、日常生活の悩みや将来への不安など、自分自身のことを一気に、一生懸命に語りながら、「先生はどう思いますか？」と私に尋ねました。私は、彼の言葉に精いっぱい耳を傾け、自分の考えを率直に伝えました。彼の人柄に触れ、知らなかった彼を発見していく思いがしました。そして、ひとしきり話し終わると、A君は私に言ったのです。「**これが僕です**。僕のことを分かっていただけでしょうか」。

思いもよらない言葉に私は驚きました。そして、A君にとって、他者に自分のことを話すということは、どれほど勇気があることだったのかを初めて理解しました。彼にとって「分かってもらう」ということは、ただ言葉をやり取りすることではなく、今の自分そのものを信頼できる他者に預けることだったのです。人が人に対して勇気を振り絞り、力強い意思を持って自分の思いを率直に伝える美しさを前に、私は感動で胸がいっぱいになりました。

**社** 会には多様な個性を持つ人たちがいます。そして私たちは、自分にはない個性を前にした時、それを受け入れることに躊躇することもあります。しかし学校は、お互いの個性を自分の尺度で解釈せず、誰もが秘めている美しい力を信じ、相手の立場に自分を置いて理解し合える場であってほしいと思います。すべての生徒が、「これが私です」とありのままの自分を仲間へ預け、安心して居続けられるクラスをつくっていきたいと思っています。

VIEW21の  
バックナンバーを読みたい

VIEW21を  
より多くの先生で読みたい

そんなときは!

VIEW21をBenesse High School Onlineでもご覧いただけます。

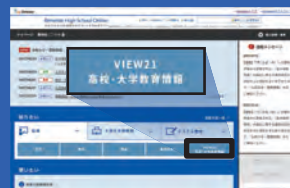
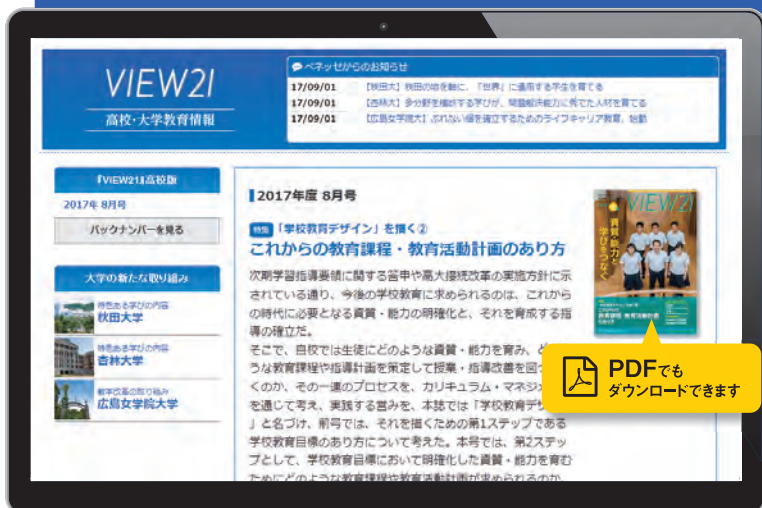
## Benesse High School Online

高校の先生の課題解決をサポートする情報サイト

過去の冊子がお手元がない場合や、より多くの先生でご共有されたい場合に、ぜひBenesse High School Onlineをご利用ください。 ※Benesse High School Onlineのご利用は無料です。

### アクセス方法

- 1 各種検索エンジンで「ハイスクールオンライン」と入力して検索  
ハイスクールオンライン 🔍 検索  
(ご利用には、学校ID/ログインコードもしくは先生個人ID/パスワードが必要です。)
- 2 ハイスクールオンラインにログイン後、トップページの「知りたい」>「指導」>「VIEW21」をクリック



## 『VIEW21』公式アカウント LINE@ スタート!

最新情報や時期ごとにオススメのコンテンツをLINEで配信! 右の2次元コードを読み取っていただくか、「友だち追加」にて「@view21」でID検索して、『VIEW21』公式アカウントのLINE@を友だちに追加してください。

@view21

でID検索! 🔍



ハイスクールオンラインに関するお問合せ

WEBサポートデスク 通話料無料

**0120-350124**

受付時間/月~金 8:00~19:00 土 8:00~17:00 (祝日、年末・年始を除く)

# VIEW21

ビュー21 高校版 Volume 6 2018年2月号

2018年2月13日発行/通巻第368号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

VIEW21編集部 〒163-0415 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2018

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】 **0120-350455**

受付時間 月~金 8:00~19:00 / 土 8:00~17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17